本資料のうち,枠囲みの内容は, 営業秘密又は防護上の観点から 公開できません。

東海第二発電所 工事計画審査資料					
資料番号	補足-60-2 改 0				
提出年月日	平成 30 年 7 月 17 日				

工事計画に係る補足説明資料

補足-60-2 水密扉の強度に関する説明書の補足説明資料

平成 30 年 7 月 日本原子力発電株式会社

水密扉の強度計算書(数値根拠書) (原子炉建屋原子炉棟水密扉)

■ 強度計算 (No14) 【原子炉建屋原子炉棟】

1. 強度評価に用いる条件

強度計算条件を下記に示す。

		全雪区粉		水頭		水の密度	
扉枠取付箇所	ヒンジ形式	示辰怵剱		(1	n)	(t/:	m^3)
		水平	鉛直	正圧	逆圧	正圧	逆圧
躯体開口内	2軸タイプ	_	—	14.8	—	1.03	_

津波による外部からの荷重を正圧とする。

上記の条件より下表の部位を評価する。

扉枠取付箇所			躯体開口
	水圧力	正圧	
	ヒンジ刑	2軸	
		扉板	0
		芯材	0
÷		ヒンジアーム	—
評価	評 価 ヒンジ部 対	ヒンジピン	—
対		ヒンジボルト	—
象		アンカー	—
部位		カンヌキ	—
11/	エーキャンフキカロ	カンヌキ受けピン	—
ルノメイ部	カンヌキ受けボルト	—	
		アンカー	—

凡例 ○:評価箇所を示す。

- :評価対象外を示す。

G	kN	扉体自重	1	262.82
G :	扉体自重			
	自重の内	訳は次の通り		ĺ
G1	: 扉本体	本(カンヌキ装置、ヒンジ	きむ)	
G2	: 枠本体	本(強度計算では含めな	こい)	
G	: 合計(強度計算では枠本体の	り自重は	含めない)



L:扉体の区画短辺の長さ 該当部位は,次の通り。



1. 040
1,000

W_u	kN/m	区画上端の単位長さ当 たりの作用荷重	3	170.1
-------	------	-----------------------	---	-------

W_u:区画上端の単位長さ当たりの作用荷重





扉板評価に必要な作用荷重を算定する。

```
添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より
W<sub>u</sub>=P<sub>hu</sub>'・L<sub>y</sub>
ここで
P<sub>hu</sub>':評価区画上端部の浸水による単位長さ当たりの静水圧荷重
P<sub>hu</sub>'= ρ・g・h<sub>u</sub> = 1.03 ×9.80665× 11.225 = 113.382 = 113.4 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)
ρ:水の密度 1.03 (t/m<sup>3</sup>)
g:重力加速度9.80665 (m/s2)
h<sub>u</sub>:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ) = 11.225 (m)
L<sub>y</sub>:受圧幅 =
```



 \mathbf{H}_{g}

 $W_u=P_{hu}'\cdot L_y$ = 113.4 × 1.500 = 170.1 = 170.1 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

	L	区画短辺の長さ	h_u	P _{hu} '	Wu
	L ₁		9.185	92.78	139.2
	L_2		10.225	103.3	155.0
採用→	L ₃		11.225	113.4	170.1
	L ₄		12.225	123.5	185.3
	L ₅		13.225	133.6	200.4
	L ₆		13.925	140.7	211.1

W_d	kN/m	区画下端の単位長さ当 たりの作用荷重	4	185.3
-------	------	-----------------------	---	-------

W_d:区画下端の単位長さ当たりの作用荷重





 $H^{h'}$



扉板評価に必要な作用荷重を算定する。





 $W_d = P_{hd}' \cdot L_y$ = 123.5 × 1.500 = 185.25 = 185.3 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

	L	区画短辺の長さ	h_d	P _{hd} '	W _d
	L ₁		10.225	103.3	155.0
	L ₂		11.225	113.4	170.1
採用→	L ₃		12.225	123.5	185.3
	L ₄		13.225	133.6	200.4
	L ₅	Ι	13.925	140.7	211.1
	L ₆		14.770	149.2	223.8







図-5.1 等分布荷重時四辺間定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)



0.05



図-5.2 等変分布荷重時四辺固定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)

Ζ	mm^3	最小断面係数	7	196000

Z:扉板の断面係数

扉板の最小断面係数を算定する。





Hg :芯材の受圧高





B :芯材の受圧幅

当該部は,以下のとおり。





7.	mm ³	断面係数	12	5890000
2	111111	р/ш//ух	12	0000000

Z :芯材(主桁)の断面係数 芯材の断面係数を算定する。 主桁 H-600×300×16×32 (JIS G 3192-2000より)



А	mm^2	断面積	13	27920

A :芯材(主桁)の断面積 芯材の断面積を算定する。

(JIS G 3192-2000より)



Y m 主桁ピッチ 14				
	Y	m	主桁ピッチ	14

Y:芯材(主桁)の主桁ピッチ



al	m	横桁ピッチ	15
a2	m	横桁ピッチ	16
a3	m	横桁ピッチ	17
a4	m	横桁ピッチ	18
a5	m	横桁ピッチ	19
a6	m	横桁ピッチ	20
	-		-
a1	m	横桁ピッチ	15

a1~a6:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a2 m 横桁ピッチ 16				
	a2	m	横桁ピッチ	16

a2:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a3 m 横桁ピッチ 17				
	a3	m	横桁ピッチ	17

a3:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a4 m	横桁ピッチ	18

a4:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a5 m 横桁ピッチ 19	5 m 横桁ピッチ 19

a5:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a6 m 横桁ピッチ 20				
	a6	m	横桁ピッチ	20

a6:芯材(横桁)の横桁ピッチ



添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より P1 = P_{h1}' ここで P_{h1}':評価作用位置における浸水津波による荷重 $P_{h1}' = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 9.705 = 98.02874$ = 98.03 (kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示) $\rho : \pi \sigma 密 g 1.03$ (t/m³) g:重力加速度9.80665(m/s²) h: 当該部分の浸水深さ = 9.705 (m)

津波荷重

21

98.03

 $P1 = P_{h1}' = 98.03 (kN/m^2)$

Ρ1

kN/m²

P1:芯材(横桁)に作用する浸水津波荷重



	P2	kN/m ²	津波	荷重	22	108	8.3			
]	P2:芯材(横桁)に作用する浸水津波荷重									
i	添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より									
]	P2=P _{h2} '									
	ここで									
]	Ph2':評価作用位置における浸水津波による荷重									
$P_{h2}' = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 10.725 = 108.3316$										
	= <mark>108.3</mark> (kN/m ²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)									
	ρ:水の密度 <mark>1.03</mark> (t/m ³)									
	g:重力加速度9.80665(m/s ²)									
			h:当該部	分の浸水深	さ	=	10.72	25 (m)		

 $P2 = P_{h2}' = 108.3 (kN/m^2)$



P3	P3 kN/m ² 津波荷重 23 118.4									
P3:芯材(横桁)に作用する浸水津波荷重										
添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より P3=P _{h3} ' ここで										
P _{h3} ':評価作用位置における浸水津波による荷重										
$P_{h3}' = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 11.725 = 118.4325$										
 = 118.4 (kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示) ρ:水の密度 1.03 (t/m³) g:重力加速度9.80665 (m/s²) 										
		h:当該部	分の浸水深	さ	=	11.72	25 (m)			

 $P3 = P_{h3}' = 118.4 (kN/m^2)$



	P4	kN/m ²	津波	荷重	24	128	8.5			
P4:芯材(横桁)に作用する浸水津波荷重										
	添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より									
	P4=P _{h4} '									
	ここで									
	P _{h4} ':評価作用位置における浸水津波による荷重									
	$P_{h4}' = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 12.725 = 128.5333$									
	= <mark>128.5</mark> (kN/m ²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)									
	ρ:水の密度 <mark>1.03</mark> (t/m ³)									
	g:重力加速度9.80665(m/s ²)									
			h:当該部	分の浸水深	さ	=	12.72	25 (m)		

 $P4 = P_{h4}' = 128.5 (kN/m^2)$



	P5	P5 kN/m ² 津波荷重 25 137.1								
	P5:芯材(横桁)に作用する浸水津波荷重									
	添付資料 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より									
	P5=P _{h5} '									
	ここで									
	Ph5':評価作用位置における浸水津波による荷重									
$P_{h5}' = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 13.575 = 137.119$								37.119		
	= <mark>137.1</mark> (kN/m ²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)									
	ρ:水の密度 <mark>1.03</mark> (t/m ³)									
	g:重力加速度9.80665(m/s ²)									
			h:当該部	分の浸水深	き	=	13.57	75 (m)		

 $P5 = P_{h5}' = 137.1 (kN/m^2)$





$$P6 = P_{h6}' = 144.9 (kN/m^2)$$

以上を纏めると下表となる。

記号	単位	番号	津波荷重	h:浸水深さ	単位
P1		24	98.03	9.705	
P2		25	108.3	10.725	
P3	1 NI / 2	26	118.4	11.725	m
P4	KIN/ M	27	128.5	12.725	111
P5		28	137.1	13.575	
P6		29	144.9	14.3475	



7	3	影开放教	07	00000
L	mm	町田馀剱	27	860000

Z :芯材(横桁)の断面係数 芯材(横桁)の断面係数を算定する。 横桁 H-250×250×9×14

(JIS G 3192-2000より)



	-			
А	mm^2	断面積	28	9143

A :芯材(横桁)の断面積 芯材(横桁)の断面積を算定する。 (JIS G 3192-2000より)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ²)	
扉板	51	74

扉板部の発生応力度は

添付資料 3.5 評価方法 (1)応力算定 a.扉板より発生応力を算定し、(2)断面検定 a. 扉板より曲げ応力度 を算定する。なお,扉板にせん断力は発生しない。

(1) 応力算定

a. 扉板

扉板に生じる荷重は、浸水津波荷重又は溢水に伴う荷重を考慮し、等変分 布荷重及び等分布荷重を受ける周辺固定支持の矩形板として, 次式により算定する。

 $M=Mx_1 \cdot W_u \cdot L^2 + Mx_2 \cdot (W_d - W_u) \cdot L^2$ → M:扉板に発生する曲げモーメント

扉板に発生するモーメントは、評価区画扉部において、作用する荷重は台形荷重となることから等分布荷重と不等分布荷重に分けること ができる。このことから、芯材による4辺固定における扉板の曲げモーメントは、等変分布荷重四辺固定スラブ曲げモーメント式と不等分布 荷重四辺固定スラブの曲げモーメント式を足した次式であらわされる。



採用 → くぐり戸のため扉板なし (2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が、許容限界値以下であることを確認する。なお、異なる荷重が同時に作用する部材については、組合せを考慮する。

扉板に生じる曲げ応力度を算定し,扉板の短期許容応力度以下であることを確認する。

a. 扉板



→ くぐり戸のため扉板なし

評価対象部位	発生応力度(N/mm ²)	
芯材	52	87

芯材の発生応力度は

添付資料 3.5 評価方法 (1)応力算定

b.芯材より発生応力を算定し, (2)断面検定 a. 芯材より応力度を算定する。

なお、ここでは横桁のせん断、曲げにおいて発生応力度結果が一番厳しい主桁の曲げの値を記載している。

b. 芯材

芯材に生じる荷重は、浸水津波荷重又は溢水に伴う荷重を 負担する芯材について算定する。 荷重負担は横桁で負担するものとして算定する。 水平方向に取付く,横桁については、等分布荷重を受ける両端支持の単純梁として、次式により算定する。


(a) 主桁



→ M:主桁に作用する曲げモーメント

₩1

主桁に作用する荷重は台形荷重であることから、受圧高上下部を支点とした 梁の等分布荷重による曲げモーメントと三角形荷重による曲げモーメント を足し合わせた本式であらわされる。ここでは、発生モーメントが厳しくな る中間主桁を算出する。







(機械工学便覧 基礎編 第2章はり A4-33頁より:両端支持三角形荷重における最大曲げ応力)



(機械工学便覧 基礎編 3-27より:両端支持等分布荷重における最大モーメント)

中間主桁 M =
$$H_g^2 \cdot \left(\frac{P_1}{9\sqrt{3}} + \frac{P_2}{8}\right) = 5.585^2 \times \left(\frac{11.20}{9\sqrt{3}} + \frac{124.7}{8}\right) = 508.6198$$

= 508.6 (kN·m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで,

₩1	Hg:受圧高(m)	8 より	5.585	(m)
1	P1:主桁に作用する三角形荷重(kN/m)	下述算定結果より	11.20	(kN/m)
	P2:主桁に作用する等分布荷重(kN/m)	下述算定結果より	124.7	(kN/m)
	c :主桁の作用荷重に対する係数(-)			

→ Q: 主桁に作用するせん断力

曲げモーメント同様梁の等分布荷重によるせん断力と三角形荷重によるせん断力を足し合わせ 本式であらわされる。ここでは、せん断力が厳しくなる中間主桁(C=1/2)を算出する。 なお、中間主桁と端主桁の断面積はその形状より(C=1/2)にはならない。



(機械工学便覧 基礎編 3-27より:両端支持等分布荷重における最大せん断力)

中間主桁
$$Q = H_g \cdot \left(\frac{P_1}{3} + \frac{P_2}{2}\right) \cdot c = 5.585 \times \left(\frac{11.20}{3} + \frac{124.7}{2}\right) \times \frac{1}{2} = 184.5377$$

= 184.5 (kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

強度計算書



(b) 横桁





23	ニで,
Υ	:主権
a1	:横梢
a2	:横梢
a3	:横梢
a4	:横梢
a5	:横梢
a6	:横梢

:主桁ピッチ(m)	16 より			
:横桁ピッチ(m)	17 より	P1 :津波荷重(kN/m	²) 24 より	98.03 (kN/
:横桁ピッチ(m)	<i>18</i> より	P2 :津波荷重(kN/m	²) 25 より	108.3 (kN/
:横桁ピッチ(m)	19 より	P3 :津波荷重(kN/m	²) 26 より	118.4 (kN/
:横桁ピッチ(m)	20 より	P4 :津波荷重(kN/m	²) 27 より	128.5 (kN/
:横桁ピッチ(m)	21 より	P5 :津波荷重(kN/m	²) 28 より	137.1 (kN/
:横桁ピッチ(m)	22 より	P6 :津波荷重(kN/m	²) 29 より	144.9 (kN/

₩8

10一定 12 ···{x=0,

横桁に作用する荷重は,受圧幅左右を支持点とした梁の両端支持等分布荷重におけるせん断力の

(機械工学便覧 基礎編 3-27より:両端支持等分布荷重におけるせん断力)



▶Q:横桁に作用するせん断力

公式であらわすことが出来る。



	23	<u>こで,</u>			_			
	Y	:主桁ピッチ(m)	16 より					
1	a1	:横桁ピッチ(m)	17 より	Γ	P1 :津波荷重(kN/m ²)	24 より	98.03	(k)
2	a2	:横桁ピッチ(m)	<i>18</i> より		P2 :津波荷重(kN/m ²)	25 より	108.3	(kN
3	a3	:横桁ピッチ(m)	19 より	Г	P3 :津波荷重(kN/m ²)	26 より	118.4	(kN
4	a4	:横桁ピッチ(m)	20 より		P4 :津波荷重(kN/m ²)	27 より	128.5	(kN
5	a5	:横桁ピッチ(m)	21 より	Γ	P5 :津波荷重(kN/m ²)	28 より	137.1	(kN
6	a6	:横桁ピッチ(m)	22 より	Г	P6 :津波荷重(kN/m ²)	29 より	144.9	(kN
					-			

b. 芯材

芯材に生じる曲げ応力度及びせん断応力度を算定し,芯材の短期許容応力度以下である ことを確認する。



評価対象部位	許容	限界値(N/	mm2)
扉板	61	235	曲げ

扉板の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。 ・材質:SS400

扉板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101」(2015年版)より

降伏点 235 N/mm², 引張強さ 400 N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は,降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN(235 , 400 \times 0.7) = 235 (N/mm²)

許容限界値は、 235 (N/mm²)

表 3-機械的性質

種類の 記号	降伏点又は耐力 N/mm ²				引張強さ	伸び			曲げ性		
		厚さ ⁹ mm]	厚さ。		0/	曲げ 角度	内側半径	試験 片の
	16以下	16を超え 40 以下	40を超え 100 以下	100 を超 えるもの	N/mm ²	mm	武职力	%	111.0250		C-4
SS330	205 以上	195 以上	175 以上	165 以上	330~430	鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5以下	5号	26 以上	180°	厚さの	1号
						鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5を超 え16以下	1A 号	21 以上		0.5 倍	
						鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ16を超 え 50以下	1A 号	26 以上			
						鋼板, 平鋼の厚さ 40 を超えるも の	4号	28 以上 ¹⁶⁾			
						棒鋼の径,辺又は対辺距離25以 下	2号	25 以上	180°	径,辺又 は対辺	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	28 以上		距離の 0.5倍	
SS400	245 以上	235 以上	215 以上	205 以上	400~510	鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5 以下	5号	21 以上	180°	厚さの 1.5倍	1号
						鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5を超え16以下	1A 号	17以上		-1742	
						鋼板, 鋼帯, 平鋼, 形鋼の厚さ 16 を超え 50 以下	1A 号	21 以上			
						鋼板, 平鋼, 形鋼の厚さ 40 を超 えるもの	4号	23 以上 ¹⁶⁾			
						棒鋼の径,辺又は対辺距離 25 以 下	2号	20以上	180°	径,辺又 は対辺 距離の 15倍	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	22 以上			

評価対象部位		許容限	₽.	N/mm ²)	
芯材	62	235	曲げ	135	せん断

芯材の許容限界値に係る仕様は,以下のとおり。

・材質:SS400

芯材の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101」(2015年版)より

降伏点 235 N/mm², 引張強さ 400 N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は,降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より



許容限界値は, 235 (N/mm²)

許容せん断応力度fs, F:基準値

$$f_s = \frac{F}{\sqrt{3}} = \frac{235}{\sqrt{3}} = \frac{135.6773}{135.6773} (N/mm^2)$$

⇒ 135 (N/mm²) (小数点第一位切り捨て、整数表示)

表 3-機械的性質

種類の 記号	降伏点又は耐力 N/mm ²				引張強さ	伸び	CK.			曲げ性		
		厚	さ ^め m]	厚さ* ⁹	就驗出	0/	曲げ 角度	内側半径	試験 片の	
	16以下	16を超え 40 以下	40を超え 100 以下	100 を超 えるもの	N/mm ²	mm	P*484.71	70				
SS330	205 以上	195 以上	175 以上	165 以上	330~430	鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5以下	5号	26 以上	180°	厚さの	1号	
						鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5を超 え16以下	1A 号	21 以上	100000	0.5 倍		
						鋼板, 鋼帯, 平鋼の厚さ 16 を超 え 50 以下	1A 号	26 以上				
						鋼板, 平鋼の厚さ 40 を超えるも の	4号	28 以上 ^{ы)}				
						棒鋼の径,辺又は対辺距離25以 下	2号	25 以上	180°	径,辺又 は対辺	2号	
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	28以上		距離の 0.5倍		
SS400	245 以上	235 以上	215 以上	205 以上	400~510	鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5以下	5号	21 以上	180°	厚さの 1.5倍	1号	
						鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5 を超え 16 以下	1A 号	17以上				
						鋼板, 鋼帯, 平銅, 形鋼の厚さ 16 を超え 50 以下	1A 号	21 以上				
						鋼板, 平鋼, 形鋼の厚さ 40 を超 えるもの	4号	23 以上 ¹⁶⁾				
						棒鋼の径,辺又は対辺距離 25 以 下	2号	20以上	180°	径,辺又 は対辺 距離の 15倍	2号	
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	22 以上				

評価対象部位	Ž.	発生応力度/ 許容限界値	
扉板	71	0.32	
扉板の許容限界値に対	する発生	応力度の応力度	北を算出する。
発生応力度/許容限界(直より前・	ページ 51 、	<i>61</i> から
74 / 235 = 0	314894		
\Rightarrow (.32 (/]	、数点以下第3位切	〕上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	3	^発 生応力度/ 許容限界値
芯材	72	0.38

芯材の許容限界値に対する発生応力度の応力度比を算出する。

主桁

発生応力度/許容限界値より前ページ 52 、 62 から

87 / 235 = 0.370213

⇒ 0.38 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

水密扉の強度計算書(数値根拠書) (原子炉建屋付属棟東側水密扉)

■ 強度計算(No.11)【原子炉建屋付属棟東側水密扉】

1. 強度評価に用いる条件(原子炉建屋水密扉)

強度計算条件を下記に示す。

		今 雪	反對	水	頭	水の	密度
扉枠取付箇所	ヒンジ形式	示辰	尔奴	(1	m)	(t/:	m^3)
		水平	鉛直	正圧	逆圧	正圧	逆圧
躯体開口内	2軸タイプ		-	22.5	-	1.03	-

上記の条件より下表の部位を評価する。

	扉枠取付	躯体壁面	
	水圧力	前	正圧
	ヒンジ刑	形式	2軸
		扉板	0
		芯材	-
÷π		ヒンジアーム	—
評価		ヒンジピン	—
対	レイン引	ヒンジボルト	—
象		ヒンジアンカー	—
部位		カンヌキ	—
11/.	カンコキゴ	カンヌキ受けピン	—
	ハンメイ司	カンヌキボルト	—
		カンヌキアンカー	—

凡例 ○:評価箇所を示す。

- :評価対象外を示す。

G	kN	扉体自重	1	58.84	
					-
G :	扉体自重				
	自重の内語	訳は次の通り			
G1	: 扉本体	、(カンヌキ装置、ヒンジ	'含む)		
G2	: 枠本体	(強度計算では含めな	えい)		
G	: 合計(歯度計算では枠本体の	の自重に	は含めない)	







強度計算書

9 より受圧幅B =

W_u=P_{hu}'·B = 196.2 × 1.600 = 313.92 = 313.9 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

区画上端の単位長さ当たりの作用荷重表

L	区画の長さ	h_u	P _{hu} '	Wu
L ₁		19.420	196.2	313.9



強度計算書

9より受圧幅B =

 $W_d = P_{hd}' \cdot B$ = 226.7 × 1.600 = 362.720 = 362.7 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

区画下端の単位長さ当たりの作用荷重表

L	区画の長さ	h_d	P _{hd} '	W_d
L ₁		22.445	226.7	362.7



L	l _y l _x	計算値	M_{x1}
L ₁		1.90	0.085



図-5.1 等分布荷重時四辺間定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)







図-5.2 等変分布荷重時四辺間定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)







P_{hu}	kN/m ²	津波荷重(上部)	10	196.2
P _{hu} :芯材に は溢水	こ作用するネ <による静水	浸水津波荷重又 <圧荷重(上部)		
添付資料	斗 6.3荷重	及び荷重の組み合わせ(1)荷重	の設定。	より
P _h = 上部静	ρ•g•h _u •水圧荷重算	章定のため、		
ρ	:水の密度 水圧作用調	1.03 (t/m ³) 気さE.L. 22.500 (m)		
P. =	g:重 h _u :当詞	力加速度9.80665 (m/s ²) 該部分の浸水深さ(区画上端高さ = <u>103</u> ×9.80665×(2	$(\underline{x}) = \frac{19}{2}$	9.420 (m)
=	1.03×9 196.2	(kN/m^2) (有効数字5桁目四括)	585 含五入7	有効数字4桁表
净	波荷重(上)	如小寺		
		短辺の長さ h _u P _{hu} 19.420 196.2]	

受圧幅 B

P _{hd}	kN/m^2	津波荷重(下部)	11	226.7
P _{hu} :芯材に は溢水	こ作用する液 、による静水	曼水津波荷重又 汪荷重(下部)		
添付資料 b. 浸水津 $P_h = \rho \cdot g$	斗 6.3荷重及 書波荷重又的 g•h _d	とび荷重の組み合わせ(1)荷重 は溢水に伴う荷重(Ph)算定式より	の設定)	
	水圧荷重算 :水の密度	章定のため, 1.03 (t/m ³)		
P —	水庄作用盾 g:重〕 h _d :当記	新2E.L. 22.500 (m) 力加速度9.80665 (m/s ²) 亥部分の浸水深さ(区画下端高 - 1.03 × 9.80665 × (さ) = 22	2.445 (m)
= =	1.03 ×9 226.7	(kN/m^2) (有効数字5桁目四	7 <mark>136</mark> 捨五入7	有効数字4桁表

受圧幅 B

評価対象部位	発生	応力度(N/mm ²)
扉板	51	24

扉板部の発生応力度は

添付資料 6.5 評価方法 (1)応力算定 a.扉板より発生応力を算定し, (2)断面検定 a. 扉板より曲げ応力度 を算定する。なお,扉板にせん断力は発生しない。

(1) 応力算定

a. 扉板

扉板に生じる荷重は,浸水津波荷重を考慮し,等変分布荷重,等分布荷重を受ける周辺固定支持の矩形板 を考慮し、集中荷重を受ける両端固定支持の梁として,次式により算定する。

$M = M_1$		M: 扉板に発生する曲げモーメント M = M = - 74.55
ここで M M ・W	$U \cdot \mathbf{I}^2 + \mathbf{M} \cdot (\mathbf{W} - \mathbf{W}) \cdot \mathbf{I}^2$	= 74.6 (kN·m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)
$M_1 = M_{x1} \cdot M_{y1}$	$\begin{array}{c} & \\ & \\ & \\ & \\ & \\ & \\ & \\ & \\ & \\ & $	M ₁ : 浸水津波荷重による扉板に発生する曲げモーメント 扉板に発生するモーメントは,評価区画扉部において,作用する荷重は台形荷重となることから等分布荷重と不等分布荷重に分けること ができる。このことから,芯材による4辺固定における扉板の曲げモーメントは,等変分布荷重四辺固定スラブ曲げモーメント式と不等分布 荷重四辺固定スラブの曲げモーメント式を足した次式であらわされる。
		$M_{1} = Mx_{1} \cdot W_{u} \cdot L^{2} + Mx_{2} \cdot (W_{d} - W_{u}) \cdot L^{2}$ $= 0.085 \times 313.9 \times (1.600)^{2} + 0.050 \times (362.7 - 313.9) \times (1.600)^{2}$ $= 74.55104$ $= 74.55 \text{ (kN \cdot m)} (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)$ $Fk the constraints of the constraints$

(2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が、許容限界値以下であることを確認する。なお、異なる荷重が同時に作用する部材については、組合せを考慮する。

a. 扉板



評価対象部位	許容	限界値(N/	mm ²)
扉板	61	205	曲げ

扉板の許容限界値に係る仕様は,以下のとおり。

•材質:

・厚さ:

扉板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼II JIS G 4303」P1213より

降伏点 205 N/mm², 引張強さ 520 N/mm²から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は,降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より F=MIN(205,520×0.7) = 205 (N/mm²)





水密扉の強度計算書(数値根拠書) (原子炉建屋付属棟西側水密扉)

■ 強度計算(No.23)【原子炉建屋付属棟西側水密扉】

1. 強度評価に用いる条件(原子炉建屋水密扉)

強度計算条件を下記に示す。

		今雪	反粉	水	頭	水の	密度
扉枠取付箇所	ヒンジ形式	示辰	们不安人	(1	n)	(t/:	m^3)
		水平	鉛直	正圧	逆圧	正圧	逆圧
躯体開口内	2軸タイプ	_	_	14.8	—	1.03	—

津波による外部からの荷重を正圧とする。

上記の条件より下表の部位を評価する。

	扉枠取付	躯体開口内			
	水圧力	正圧			
	ヒンジ用	2軸			
		0			
		芯材			
	ヒンジ部	ヒンジアーム	—		
評価		ヒンジピン	—		
対		ヒンジボルト	—		
象		ヒンジアンカー	—		
部位	上、コンカ	カンヌキ	—		
117.		カンヌキ受けピン	—		
	カンメイ司	カンヌキボルト	—		
		カンヌキアンカー	—		

凡例 ○:評価箇所を示す。

- :評価対象外を示す。

G	kN	扉体自重	1	10.30	<u> </u>
G:	扉体自重				 凡例: に
	自重の内語	沢は次の通り		r	
G1	: 扉本体	:(カンヌキ装置、ヒンシ	ジ含む)		(小数点第三位切り上げ、小数点第二位表
G2	: 枠本体	(強度計算では含め)	ない)		(小数点第三位切り上げ、小数点第二位表
G	: 合計(強度計算では枠本体(の自重に	は含めない)	

注)補足資料の数値計算説明書においては水密扉の自重に枠本体自重を含める



横桁

Г



9より受圧幅B = 1.005

W_u=P_{hu}'·B = 140.7 × 1.005 = 141.4035 = 141.4 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入、有効数字4桁表示)

区画上端の単位長さ当たりの作用荷重表

	L	区画短辺の長さ	h _u	P _{hu} '	Wu
	L ₁		12.810	129.4	130.0
採用→	L ₂		13.090	132.2	132.9
	L ₃		13.330	134.6	135.3
	L ₄		13.630	137.7	138.4
	L ₅		13.930	140.7	141.4
	L ₆		14.230	143.7	144.4
	L ₇		14.470	146.2	146.9


W_d=P_{hd}'·B = 143.7 × 1.005 = 144.419 = 144.4 (kN/m) (有効数字5桁目四捨五入、有効数字4桁表示)

区画下端の単位長さ当たりの作用荷重表

	L	区画短辺の長さ	h _d	P _{hd} '	W _d
	L ₁		13.090	132.2	132.9
	L_2		13.330	134.6	135.3
	L_3		13.630	137.7	138.4
	L_4		13.930	140.7	141.4
採用→	L ₅		14.230	143.7	144.4
	L ₆		14.470	146.2	146.9
	L ₇		14.750	149.0	149.7







図-5.1 等分布荷重時四辺固定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)



 M_{x2}

L

L

 L_2

 L_3

L

L

L

 L_7

採用→

図-5.2 等変分布荷重時四辺固定スラブの曲げモーメントとたわみ (ν=0)



Z:扉板の断面係数

扉板の断面係数を算定する。



(機械工学便覧 基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)



L	b	h	Z
L ₁		12	19660
L ₂		12	19660
L ₃		12	19660
L ₄		12	19660
L ₅		12	19660
L ₆		12	19660
L ₇		12	19660

H_g m 受圧高 **8**

Hg :芯材の受圧高



B m 受圧幅 **9**

B :芯材の受圧幅当該部は、以下のとおり。





	1.()3	×	9.80665	×	12.810	=	129.39	919	
	1	29.	4	(kN/m^2)	!)	(有効数日	学 5桁	行目四指	き五.	入、
力	く津	波	によ	る静水日	Ξ(_	上部)表				
L	,	X	画知	豆辺の長	さ	h _u		P _{hu}		
5	1					12.810	1	29.4		
5	2	T				13.090	1	32.2		
5	3					13.330	1	34.6		
	4					13.630	1	37.7		
5	5					13.930	1	40.7		
	6					14.230	1	43.7		
5	7	T				14.470	1	46.2		

浸

 L_7

採用→









Ζ	mm ³	断面係数	14	31670
		171 🖽 11:391		

Z :芯材(主桁)の断面係数 芯材の断面係数を算定する。





A mm ²	断面積	15	1900
-------------------	-----	----	------

A :芯材(主桁)の断面積 芯材の断面積を算定する。





-				
Y	m	主桁ピッチ	16	

Y:芯材(主桁)の主桁ピッチ



al	m	横桁ピッチ	17	
a2	m	横桁ピッチ	18	
a3	m	横桁ピッチ	19	
a4	m	横桁ピッチ	20	
a5	m	横桁ピッチ	21	
a6	m	横桁ピッチ	22	
a7	m	横桁ピッチ	23	

a1~a7:芯材(横桁)の横桁ピッチ



al	m	横桁ピッチ	17

al:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a2 m 横桁ピッチ	18

a2:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a3 m 構桁ピッチ 19				
	a3	m	横桁ピッチ	19

a3:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a4 m 横桁ピッチ 20	

a4:芯材(横桁)の横桁ピッチ



				 _
a5	m	横桁ピッチ	21	

a5:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a6 m 横桁ピッチ .					
	a6	m	横桁ピッチ	22	

a6:芯材(横桁)の横桁ピッチ



a7 m 横桁ピッチ 23				
	a7	m	横桁ピッチ	23

a7:芯材(横桁)の横桁ピッチ































 $P6 = P_{h6}' = 144.9 (kN/m^2)$





$$P7 = P_{h7}' = 147.6 (kN/m^2)$$

以上を纏め	りると下表と	なる。

記号	単位	番号	津波荷重	h:浸水深さ	単位
P1		24	130.8	12.950	
P2		25	133.4	13.210	
P3		26	136.2	13.480	
P4	kN/m^2	27	139.2	13.780	m
P5		28	142.2	14.080	
P6		29	144.9	14.350	
P7		30	147.6	14.610	



7		断而区粉	21	63330
L	1010	时国际数	51	00000

Z :芯材(横桁)の断面係数

芯材(横桁)の断面係数を算定する。





А	mm^2	断面積	32	3800
Л	mm	的面傾	52	3000

A :芯材(横桁)の断面積

芯材(横桁)の断面積を算定する。



評価対象部位	発生応力度(N/mm ²)	
扉板	51	56

扉板部の発生応力度は

添付資料 8.5 評価方法 (1)応力算定 a.扉板より発生応力を算定し、(2)断面検定 a. 扉板より曲げ応力度 を算定する。なお,扉板にせん断力は発生しない。

(1) 応力算定

a. 扉板

扉板に生じる荷重は、浸水津波荷重を考慮し、等変分布荷重及び等分布荷重を受ける 周辺固定支持の矩形板として, 次式により算定する。

 $M=Mx_1 \cdot W_1 \cdot L^2 + Mx_2 \cdot (W_d - W_u) \cdot L^2$ → M:扉板に発生する曲げモーメント

扉板に発生するモーメントは,評価区画扉部において,作用する荷重は台形荷重となることから等分布荷重と不等分布荷重に分けること ができる。このことから、芯材による4辺固定における扉板の曲げモーメントは、等変分布荷重四辺固定スラブ曲げモーメント式と不等分布 荷重四辺固定スラブの曲げモーメント式を足した次式であらわされる。





採用

(2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が、許容限界値以下であることを確認する。

a. 扉板



評価対象部位	発生	応力度(N/mm ²)
芯材	52	79

芯材の発生応力度は

添付資料 8.5 評価方法 (1)応力算定
b.芯材より発生応力を算定し,(2)断面検定 a. 芯材より応力度を算定する。
なお,ここでは横桁のせん断,曲げにおいて発生
応力度結果が一番厳しい主桁の曲げの値を記載している。

b. 芯材

芯材に生じる荷重は、浸水津波荷重に伴う荷重を考慮し、荷重を負担する芯材について算定する。 荷重負担は横桁で負担するものとして算定する。 水平方向に取付く、横桁については、等分布荷重を受ける両端支持の単純梁として、次式により算定する。



(a) 横桁



M:横桁に作用する曲げモーメント

横桁に作用する荷重は、受圧幅左右を支持点とした梁の両端支持等分布荷重における曲げ モーメントの公式であらわすことが出来る。



(機械工学便覧基礎編 3-27より:両端支持等分布荷重における曲げモーメント)





22	こで,			_			
Y	:主桁ピッチ(m)	16 より	(m)				
a1	:横桁ピッチ(m)	<i>17</i> より	(m)	P1 :津波荷重(kN/m ²)	24 より	130.8	(kN/m^2)
a2	:横桁ピッチ(m)	<i>18</i> より	(m)	P2 :津波荷重(kN/m ²)	25 より	133.4	(kN/m^2)
a3	:横桁ピッチ(m)	19 より	(m)	P3 :津波荷重(kN/m ²)	26 より	136.2	(kN/m^2)
a4	:横桁ピッチ(m)	20 より	(m)	P4 :津波荷重(kN/m ²)	27 より	139.2	(kN/m^2)
a5	:横桁ピッチ(m)	21 より	(m)	P5 :津波荷重(kN/m ²)	28 より	142.2	(kN/m^2)
a6	:横桁ピッチ(m)	22 より	(m)	P6 :津波荷重(kN/m ²)	29 より	144.9	(kN/m^2)
a7	:横桁ピッチ(m)	23 より	[m)	P7 :津波荷重(kN/m ²)	30 より	147.6	(kN/m^2)

→ Q:横桁に作用するせん断力 横桁に作用する荷重は,受圧幅左右を支持点とした梁の両端支持等分布荷重におけるせん断力の 公式であらわすことが出来る。



₩1

(機械工学便覧 基礎編 3-27より:両端支持等分布荷重におけるせん断力)





	22	_で,						
	Y	:主桁ピッチ(m)	<i>16</i> より	(m)			
1	a1	:横桁ピッチ(m)	<i>17</i> より	(m)	P1 :津波荷重(kN/m ²)	24 より	130.8 (kN/m^2)
2	a2	:横桁ピッチ(m)	<i>18</i> より	(m)	P2 :津波荷重(kN/m ²)	25 より	$133.4 (kN/m^2)$
3	a3	:横桁ピッチ(m)	<i>19</i> より	(m)	P3 :津波荷重(kN/m ²)	26 より	136.2 (kN/m^2)
4	a4	:横桁ピッチ(m)	20 より	(m)	P4 :津波荷重(kN/m ²)	27 より	139.2 (kN/m^2)
5	a5	:横桁ピッチ(m)	21 より	(m)	P5 :津波荷重(kN/m ²)	28 より	142.2 (kN/m^2)
6	a6	:横桁ピッチ(m)	22 より	(m)	P6 :津波荷重(kN/m ²)	29 より	144.9 (kN/m^2)
7	a7	:横桁ピッチ(m)	23 より	(m)	P7 :津波荷重(kN/m ²)	30 より	147.6 (kN/m^2)
b. 芯材 芯材に生じる曲げ応力度及びせん断応力度を算定し,芯材の短期許容応力度以下であることを確認する。



評価対象部位	許容	限界值(N/	mm ²)
扉板	61	235	曲げ

扉板の許容限界値に係る仕様は,以下のとおり。

・材質: ・厚さ: mm)

扉板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼II JIS G 3101」(2015年版)より

降伏点 235 N/mm², 引張強さ 400 N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は,降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN(235 , 400 \times 0.7) = 235 (N/mm²)

許容限界値は, 235 (N/mm²)

表 3-	機械的性質
24.5	THE THE PLANT AND

種類の 記号	降伏点又は耐力 N/mm ²				引張強さ	検査 伸び				曲げ性	
		厚 n 16を超え	さ ⁹⁾ mm 40を超え	100 を超		厚さ ^{。)} mm	試験片	%	曲げ 角度	内側半径	試験 片の
\$\$220	16以下	40以下	100以下	えるもの	N/mm ²	鋼振 鋼歩 亚銅の厚さく以下	《早	26 12 1-	1900	回さの	1县
33350	205 841	193 8/1	113 812	105 841	330 - 430	編板, 鋼帯, 平銅の厚さ5 を超 え 16 以下	」。 1A号	20 以上	180	№ 8 V) 0.5 倍	1.9
						鋼板, 鋼帯, 平鋼の厚さ 16 を超 え 50 以下	1A 号	26 以上			
						鋼板, 平鋼の厚さ 40 を超えるも の	4号	28 以上 ¹⁶⁾			
						棒鋼の径,辺又は対辺距離25以 下	2号	25 以上	180°	径,辺又 は対辺	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	28 以上		距離の 0.5倍	
SS400	245 以上	235 以上	215 以上	205 以上	400~510	鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5 以下	5号	21 以上	180°	厚さの 1.5倍	1号
						鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5を超え16以下	1A 号	17以上		0.0928	
						鋼板, 鋼帯, 平鋼, 形鋼の厚さ 16を超え 50以下	1A 号	21 以上			
						鋼板, 平鋼, 形鋼の厚さ 40 を超 えるもの	4 号	23 以上 ¹⁰			
						棒鋼の径,辺又は対辺距離 25 以 下	2号	20以上	180°	径,辺又 は対辺 距離の 15倍	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	22 以上			

評価対象部位		許容限	₹界値(№	√mm²)	
芯材	62	235	曲げ	135	せん断

芯材の許容限界値に係る仕様は,以下のとおり。

•材質: 38 (mm) ・厚さ:

芯材の許容限界値を算出する。

「鉄鋼II JIS G 3101」(2015年版)より

降伏点 235 N/mm², 引張強さ 400 N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN(235 , 400 \times 0.7) = 235 (N/mm²)

許容限界値は, 235 (N/mm²)

許容せん断応力度fs, F:基準値

$$f_s = \frac{F}{\sqrt{3}} = \frac{235}{\sqrt{3}} = \frac{135.6773}{(N/mm^2)}$$

 $\Rightarrow 135 (N/mm^2)$ (小数点第一位切り捨て、整数表示)

表 3-機械的性質

種類の 記号	降伏点又は耐力 N/mm ²				引張強さ	伸び				曲げ性	
nu 19	16日下	厚 n 16を超え 40 以下	さ ⁹⁾ 1m 40を超え 100 以下	100 を超 えろもの	N/mm ²	厚さ" [。] mm	試験片	%	曲げ 角度	内側半径	試験 片の
SS330	205 以上	195 以上	175 以上	165 以上	330~430	鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5以下 鋼板,鋼帯,平鋼の厚さ5を超	5号 1A号	26 以上 21 以上	180°	厚さの 0.5倍	1号
						え 16 以下 鋼板, 鋼帯, 平鋼の厚さ 16 を超 え 50 以下	1A 号	26 以上			
						鋼板, 平鋼の厚さ 40 を超えるも の	4号	28 以上 ¹⁶⁾			
						棒鋼の径,辺又は対辺距離25以 下	2 号	25 以上	180°	径,辺又 は対辺	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	28 以上		距離の 0.5倍	
SS400	245 以上	235 以上	215 以上	205 以上	400~510	鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5 以下	5号	21 以上	180°	厚さの 1.5倍	1号
						鋼板,鋼帯,平鋼,形鋼の厚さ 5を超え16以下	1A 号	17以上			
						鋼板, 鋼帯, 平鋼, 形鋼の厚さ 16 を超え 50 以下	1A 号	21 以上			
						鋼板, 平鋼, 形鋼の厚さ 40 を超 えるもの	4号	23 以上 ¹⁰			
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 以 下	2号	20以上	180°	径,辺又 は対辺 距離の 1.5倍	2号
						棒鋼の径, 辺又は対辺距離 25 を 超えるもの	14A 号	22 以上			

評価対象部位	Ž.	発生応力度/ 許容限界値	
扉板	71	0.24	
扉板の許容限界値に対す	する発生	=応力度の応力度	北を算出する。
発生応力度/許容限界値	〔より前・	ページ 51 、	<i>61</i> から
56 / 235 = 0.2	238298		
\Rightarrow 0.	24 (기	、数点以下第3位切]上げ、小数点第2位表示)

評価対象部位	3	^遙 生応力度/ 許容限界値
芯材	72	0.34

芯材の許容限界値に対する発生応力度の応力度比を算出する。

橫桁

発生応力度/許容限界値より前ページ 52 、 62 から

79 / 235 = 0.33617

⇒ 0.34 (小数点以下第3位切上げ、小数点第2位表示)

水密扉の強度計算書(数値根拠書) (原子炉建屋付属棟北側水密扉1)

1. 評価条件

「3.5 評価方法」に用いる評価条件を第3-7表に示す。

対	記号	単 位		数 値			
象 部 位			定義	原子炉建屋付属棟北側水密扉1			
	L ₄	m	区画短辺の長さ				
	W_1	kN/m	最上段部の単位長さ 当たりの作用荷重	2	128. 2		
	W_2	kN/m	中段上部の単位長さ 当たりの作用荷重	③ 135.7			
	W3	kN/m	中段下部の単位長さ 当たりの作用荷重	④ 142.7			
	W_4	kN/m	最下段部の単位長さ 当たりの作用荷重	(5) 148. 8			
扉	M _{X1}	-	区画1等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	6 0.074			
板	M_{X2}	_	区画1等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	⑦ 0.042			
	M_{X3}	_	区画2等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	(8) 0.072			
	M_{X4}	_	区画2等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	9	0.042		
	M _{X5}	_	区画3等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	10	0.063		
	M _{X6}	-	区画3等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	11)	0. 038		
	Z ₁	mm ³	断面係数	12 12360			

第3-7表 強度評価に用いる条件(1/4)

		×14 °			=, =,		
対					数值		
象 部 位	記号	単 位	定義	原子炉建屋付属棟北側水密扉1			
	Hg	m 受圧高		13			
	B ₁	m	受圧幅				
	P _{h1}	kN/m^2	津波による静水圧荷重 (最上部)	15	128.2		
芯材(P_{h2}	kN/m^2	津波による静水圧荷重 (中間上部)	<u>(16)</u>	135.7		
主 桁)	P_{h3}	kN/m²	津波による静水圧荷重 (中間下部)		142.7		
	P_{h4}	kN/m^2	津波による静水圧荷重 (最下部)	18	148.8		
	Z_2	mm^3	断面係数	19	131964		
	A_1	mm ² 断面積		20	695.5		
	al	m	主桁ピッチ	21)			
	a2	m	主桁ピッチ	22)			
	a3	m	主桁ピッチ	23)			
	Y	m	縦桁ピッチ	24)			
材	p1	kN/m^2	津波による水圧荷重	25	131.9		
(縦	p2	kN/m^2	津波による水圧荷重	26	139.1		
桁	p3	kN/m^2	津波による水圧荷重	27)	145.7		
	Z ₃	mm^3	断面係数	28)	31264		
	Z_4	mm ³	断面係数	29)	67396		
	A_2	mm ³	断面積	30	1044		
	A_3	mm^3	断面積	31	654		

第3-7表 強度評価に用いる条件(2/4)

対象部位		記号	単 位	定義		数 値
		W _X	kN	扉体自重	32	
ţ	Ļ	Ро	kN	水圧荷重	33)	277.5
通		R _r	kN	ヒンジ部にかかる 扉自重反力	ヒンジ部にかかる 扉自重反力 34	
	共通	L _r	m	扉体重心~ヒンジ中心 間距離	35)	
		Lj	m	ヒンジ中心間距離	36)	
	枟	Z_5	mm^3	断面係数	37)	10666
	权	A_4	mm^2	断面積	38)	1600
	ピン	L ₂	mm	軸支持間距離	39)	130
		B_2	mm	ブッシュ長さ	40	80
E		Z ₆	mm^3	断面係数	41	6283
レン		A_5	mm^2	断面積	42	1257
	ヒ ン ジ 休	n_1	本	本数	43)	4
	ボルト	A_{b1}	mm^2	1本当たりの断面積 (M16)	44)	157
	ヒ ン(ジ扉	n ₂	本	本数	45	4
	、 ボ ル ト	A _{b2}	mm^2	1本当たりの断面積 (M16)	46	157

第3-7表 強度評価に用いる条件(3/4)

対象部位 記 号 単		単 位	定義	数值
ロッ	L ₃	mm	作用点間距離	(7) 19
ク	Z_7	mm ³	断面係数	48 12271
	A_6	mm^2	断面積	49 1963
ロ ツ ク	n ₃	本	本数	50 4
ボルト	A_{b3}	mm^2	1本当たりの断面積 (M16)	<u>51</u> 157
アン	n ₄	本	本数	52 15
カーボ	A _a mm ² 1本当たりの表 (M16)	1本当たりの表面積 (M16)	§3) 6535	
ルト	A_{b4}	mm^2	1本当たりの断面積 (M16)	54) 157

第3-7表 強度評価に用いる条件(4/4)

2. 強度評価結果

原子炉建屋水密扉の強度評価結果を第4-1表に示す。水密扉の各部材の断面検定を行った 結果,発生応力度又は荷重は許容限界値以下である。

÷		//•= = = •				
夕玧	亚研究免动位	発生応力度	許容限界値	彩开内力度/款应限网		
~~~ 你		計個內家即位	$(N/mm^2)$	$(N/mm^2)$	光生心刀度/ 計谷ኲ外	
	原子炉建屋	扉板	55 216	64 235	70 0.92	
	水密扉1	芯材(注1)	56 131	65 235	74 0.56	

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(1/3)

(注1) 主桁及び縦桁のせん断及び曲げのうち評価結果が最も厳しくなる中間縦桁区画1

の曲げによる値を記載

名称	評価対	発生 応力度 (N/mm ² )	許容 限界値 (N/mm ² )	発生応力度/ 許容限界値	
		板	57 22	66 118	75 0.19
	ヒンジ部	ピン (注1)	58 250	67 345	76 0 <b>.</b> 73
原子炉建屋付属棟 北側水密扉1		ヒンジボルト (枠体側)	59 111	68 205	$\overline{\eta}$ 0.55
		ヒンジボルト (扉側)	60 111	69 118	78 0.95
	ロックバー 部	ロックバー	61 108	70 345	79 0.32
		ロックボルト	62 111	71) 205	80 0.55

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(2/3)

(注1) せん断及び曲げのうち評価結果が厳しくなる曲げによる値を記載

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(3/3)

名称	評価対象部位	発生 応力(kN)	許容 限界値 (kN)	発生応力度/ 許容限界値
原子炉建屋付属棟 北側水密扉1	アンカーボルト	63 19	72) 26	<ol> <li>0.74</li> </ol>

$L_4$	m	区	面短辺の長さ	(1)	Ι Π
L ₄ :原子炉建屋付属棟北側水密扉1の扉体の区画短辺の長さ					
該	当部位は、	添付	扉体組立図	「SWT	-7-002」参照。

			-	
W ₁	kN/m	最上段部の単位長さ 当たりの作用荷重	2	128. 2

W1:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の最上段部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₁=Ph'

ここで

Ph':最上段部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' = ρ · g · h = 1.03×9.80665×12.69=128.1797802=128.2(k N/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=12.69(m)

W2         kN/m         中段上部の単位長さ 当たりの作用荷重         ③         135.7	
-----------------------------------------------------------------------	--

W2:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の中段上部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₂=Ph'

ここで

Ph':中段上部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 13.43 = 135.6544088 = 135.7 (k N/m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=13.43(m)

$W_3$	kN/m	中段下部の単位長さ 当たりの作用荷重	4	142.7
-------	------	-----------------------	---	-------

W3:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の中段下部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₃=Ph'

ここで

Ph':中段下部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho$  · g · h = 1.03×9.80665×14.13=142.7250034=142.7(kN/m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.13(m)

W ₄ kN/m	最下段部の単位長さ 当たりの作用荷重	5	148.8
---------------------	-----------------------	---	-------

W4:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の最下段部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₄=Ph'

ここで

Ph':最下段部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho$  · g · h = 1.03×9.80665×14.73=148.7855131=148.8(k N/m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.73(m)

$M_{X1}$	-	区画1等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	6	0.074
----------	---	-------------------------------	---	-------

M_{x1}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



M _{X2}	-	区画1等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	7	0.042	
-----------------	---	--------------------------------	---	-------	--

Mx2:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



図-5.2 等変分布荷重時四辺間定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)

M _{X3}	-	区画2等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	8	0.072	
-----------------	---	-------------------------------	---	-------	--

M_{X3}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



$M_{X4}$	_	区画2等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	9	0.042	
----------	---	--------------------------------	---	-------	--

M_{X4}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



図-5.2 等変分布荷重時四辺間定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)

$M_{\rm X5}$	-	区画3等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	10	0.063	
--------------	---	-------------------------------	----	-------	--

M_{x5}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



M _{X6}	-	区画3等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	11)	0.038	
-----------------	---	--------------------------------	-----	-------	--

M_{x6}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の区画3等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



|--|

Z₁:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の扉板の断面係数 扉板の断面係数を算定する。

(機械工学便覧 基礎編  $\alpha 3$  材料力学  $\alpha -22$ ページより)  $Z_1 = (1/6) \cdot bh^2$  $= (1/6) x515x12^2 = 12360 (mm^3)$ 

Hg	m	受圧高	(13)	

Hg:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材の受圧高

当該部分は,添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

$B_1$	m	受圧幅	14)		

B₁:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材の受圧幅

当該部分は,添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

$P_{h1}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(最上部)	15	128.2
----------	----------	---------------------	----	-------

P_{h1}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)に作用する津波による

静水圧荷重(最上部) 添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より

b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph=\rho \cdot g \cdot h$ 

最上部静水圧荷重算定のため,

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より

 $\rho$ :水の密度1.03 (t/m³)

水圧作用高さEL.8.2 (m)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=12.69m

 $P_{h1} = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 12.69$ 

- =128.1797802
- =128.2(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$P_{h2}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(中間上部)	16	135.7
----------	----------	----------------------	----	-------

P_{h2}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)に作用する津波による

静水圧荷重(中間上部) 添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より

b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph=\rho \cdot g \cdot h$ 

中間上部静水圧荷重算定のため,

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より

 $\rho$ :水の密度1.03  $(t/m^3)$ 

水圧作用高さEL.8.2 (m)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=13.43m

 $P_{h1} = \rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 13.43$ 

= 135.6544088

=[135.7(kN/m²)] (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$P_{h3}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(中間下部)	17	142.7
----------	----------	----------------------	----	-------

Ph3:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)に作用する津波による

静水圧荷重(中間下部) 添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph = \rho \cdot g \cdot h$ 

中間下部静水圧荷重算定のため、

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より

ρ:水の密度1.03 (t/m³)

水圧作用高さEL.8.2 (m)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.13m

 $P_{h3} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 14.13$ 

= 142.7250034

= <u>142.7(kN/m²)</u> (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$P_{h4}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(最下部)	18	148.8
----------	----------	---------------------	----	-------

P_{h4}:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)に作用する津波による静水圧荷重(最下部) 添付 扉体組立図「SWT-7-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 (1)荷重の設定

- b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より
  - $\mathsf{Ph}=\rho ~ \bullet ~ \mathsf{g} \bullet \mathsf{h}$
  - 最下部静水圧荷重算定のため,
  - 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より
    - $\rho$ :水の密度1.03 (t/m³)

水圧作用高さEL.8.2 (m)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.73m

 $P_{h4} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 14.73$ 

= 148.7855131

= 148.8(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$Z_2$	mm ³	断面係数	19	131964	
-------	-----------------	------	----	--------	--

Z₂ : 芯材の断面係数

芯材(主桁)の断面係数を算定する。

ここでは、主桁強度評価結果で用いた中間主桁の断面係数を記載する。





$A_1$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	20 695.5	
$A_1$ : $\overline{a}$	芯材(主桁	)の断面積		
22	では,強度	<b>度評価において負担す</b>	る強軸側の面積(ウ	ェブ部)を算定する。
Δ =	(125-0-0)	x6 5		I
m ₁ -	$(123 \ 9 \ 9)$ 695. 5 (mm ² )	]		1

al	m	主桁ピッチ	21)
a1:原	子炉建屋付	「属棟北側水密扉1の芯	「材(横桁)の主桁ピッチ
当該音	『分は, 以	下のとおり。	

a2	m	主桁ピッチ	チ 22
a2 : 原	子炉建屋向	计属棟北側水密扉	扉1の芯材(横桁)の主桁ピッチ
当該音	移分は,以	下のとおり。	

a3	m	主桁ピッチ	23	
a3:原	子炉建屋付	计属棟北側水密扇	1の芯材(横桁)の主桁ピッチ	
当該普	部分は、以	下のとおり。		
		Г		
	1	1	F	
Y	m	縦桁ピッチ	24	
Y a:原∃	m 子炉建屋付)	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉	 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	24 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	24	
¥ a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u>3</u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
¥ a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原극 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原= 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	- 24 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以 ⁻	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u>2</u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
¥ a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は、以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	 の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
¥ a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。		
Y a:原子 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u> </u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原子 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u> し</u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Y a:原子 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u>2</u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	
Υ a:原Ξ 当該書	m 子炉建屋付) 部分は,以	縦桁ピッチ 属棟北側水密扉 下のとおり。	<u>し</u> の芯材 (縦桁) の縦桁ピッチ	

p1 kN/r	m ² 津波による水圧荷重	重 25 131.9
---------	--------------------------	------------

p1:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)下図に作用する荷重 評価作用位置における津波による荷重

- p1= ρ g h= 1.03x9.80665x13.055=131.8665902
  - = [131.9(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

表4.3-1よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=13.055(m)



主桁に生じる荷重の例

p2	$kN/m^2$	津波による水圧荷重	26)	139.1	
----	----------	-----------	-----	-------	--

p2:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)下図に作用する荷重 評価作用位置における津波による荷重

- p2= ρ g h= 1.03x9.80665x13.775=139.1392019
  - = 139.1(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

表4.3-1よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=13.775(m)



主桁に生じる荷重の例

p3 kN/	n ² 津波による水圧荷重	27 145.7
--------	--------------------------	----------

p3:原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材(主桁)下図に作用する荷重 評価作用位置における津波による荷重

p3=  $\rho$  · g · h= 1.03x9.80665x14.425=145.704754

## = 145.7(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

表4.3-1よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=14.425(m)



主桁に生じる荷重の例

$Z_3 mm^3$	断面係数	28)	31264	
------------	------	-----	-------	--

Z₃ : 芯材(中間縦桁)の断面係数を算定する。

ここでは、主桁強度評価結果で用いた中間縦桁の断面係数を記載する。



$$e_{1} = d - \frac{d^{2} \cdot t + s^{2} \cdot (b - t)}{2 \cdot (b \cdot s + h \cdot t)} = 125 - \frac{125^{2}x9 + 9^{2}x(50 - 9)}{2x(50x9 + 116x9)}$$

= 125 - <u>143946</u> 2988 = 76. 8253012

= 76.83(mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$e_{2} = \frac{d^{2} \cdot t + s^{2} \cdot (b - t)}{2 \cdot (b \cdot s + h \cdot t)} = \frac{125^{2}x9 + 9^{2}x(50 - 9)}{2x(50x9 + 116x9)}$$

$$= \frac{143946}{2988} = 48.1746988$$

= 48.17(mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$I = \frac{1}{3} \cdot \{t \cdot e_1^3 + b \cdot e_2^3 - (b-t) \cdot (e_2 - s)^3\}$$
  
= 1/3x {9x76. 83³+50x48. 17³-(50-9) x (48. 17-9)³}  
= 1/3x {4081642. 929+5588560. 326-41x60098. 09621} = 1/3x7206181. 31=2402060. 437  
= 2402000 (mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Z_3 = \frac{1}{e_1} = 2402000/76.83 = 31263.82923$$
  
= 31264(mm³) (小数点第一位切り上げ,整数表示)

$Z_4$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	29 <b>67396</b>	
Z4 :	芯材(端縦	〔桁〕の断面係数を算	定する。	

ここでは、主桁強度評価結果で用いた端縦桁の断面係数を記載する。



- $Z_4 = \frac{\mathbf{a} \cdot \mathbf{d}^3 \mathbf{h}^3 \quad (\mathbf{a} \mathbf{t})}{6\mathbf{d}}$  $= \frac{65 \times 125^3 109^3 \quad (65 6)}{6 \times 125}$  $= 67395. \ 21867$ 
  - = 67396 (mm³) (小数点第一位切り上げ,整数表示)



Po:設計水圧荷重。今回受圧幅と受圧高が既設躯体開口より小さい為、躯体開口内 にかかる水圧荷重が扉にかかるものとする。水圧荷重の計算は受圧幅と受圧高の 数値を躯体開口幅と躯体開口高の数値に置き換えて計算するものとします。

Po=  $\rho \cdot B_1 \cdot (Ho^2 - H1^2)/2$ 

= 10. 1x0. 960x (14.  $80^2$ -12. 720²)/2

- = 10.1x0.960x57.2416/2
- = 277.5072768kN/m³

= <u>277.5kN/m³</u> (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



R _r	kN	扉自重反力 34 2.045	
$R_r$ :	ヒンジ・ロ	ックバーに作用する扉自重による反力	
R _r =	$W_X \cdot \left( \frac{L_r}{L_i} \right)$	)	
=	4.95x(0.	595/1.440)	
=	2.0453125		
=	2.045 (kN	$\Sigma$	
	(有効数字	5桁目四捨五入有効数字4桁表示)	
L _r	m	扉体重心~ヒンシ中心間距離 [35	
L _r : Ā	扉重心位置;	からヒンジ中心間距離	
(7	忝付 扉体?	組立図「SWT-7-002」参照)	
Lj	m	ヒンジ中心間距離 36 1.440	
L _j : ‡	表遠端ヒン	ジ間のヒンジ中心間水平距離	
(}	忝付 扉体》	組立図「SWT-7-002」参照)	
	0		
Z ₅	mm ³	断面係数 37 10666	
$Z_5$ :	ヒンジ板の	断面係数	፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟
とこ	/ジ板の断	面係数を算定する。	b
(}	忝付 ヒン	ジ部詳細図「SWT-7-004」参照)	
(機械	工学便覧	基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)	

$$Z_5 = (\frac{1}{6}) \cdot b \cdot h^2 = (1/6) \times 40 \times 40^2 = 10666.666 \cdots$$

10666mm² (少数点以下第1位切下げ整数表示)

A4         mm ² 断面積         38         1600
--------------------------------------------------------

A₄ : ヒンジ板の断面積

ヒンジ板の断面積を算定する。

(添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

 $A_4 = 40 \times 40 = 1600 \text{mm}^2$ 

$L_2$	mm	軸支持間距離	39 130	

L₂ : ヒンジピンにおいて水圧荷重が作用するヒンジ板支持部におけるヒンジピン 軸支持

間の水平距離

	(添付	ヒン	ジ部詳細図	「SWT-7-0	04」	参照)
$B_2$		mm	ブッシ:	ュ長さ	(40)	80

B2:水圧荷重がヒンジピンに作用するブッシュ長さ

(添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

$Z_6$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	41)	6283	

Z₆ : ヒンジピンの断面係数

ヒンジピンの断面係数を算定する。

(添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

(機械工学便覧 基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)



 $Z_6 = (\pi/32) \cdot d^3 = (\pi/32) \times 40^3 = 6283.185307$ 

= <u>6283mm³</u> (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)

$A_5$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	42)	1257

A₅ : ヒンジピンの断面積

ヒンジピンに断面積を算定する。

(添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

$$A_{5}=\left(\frac{\pi}{4}\right) \cdot d^{2}=\left(\frac{\pi}{4}\right) \times 40^{2}=1256.637061$$
$$= 1257 \text{ mm}^{2} (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)$$

n ₁ 本 本数 43	4
------------------------	---

n1: 扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのヒンジボルト(枠体側)の本数
 (添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

$A_{b1}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	44	157	

A_{b1} : ヒンジボルト(枠体側)(M16)1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

 $A_{b1}$ = 157mm²

$n_2$	本	本数	45 4

n2: 扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのヒンジボルト(扉側)の本数
 (添付 ヒンジ部詳細図「SWT-7-004」参照)

$A_{b2}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	46 157

Ab2 : ヒンジボルト(扉側)(M16)1本あたりの有効断面積
 (JIS B 1082: 2009 より)

# $A_{b2} = 157 \text{mm}^2$

$L_3$	mm	作用点間距離	<u>4</u> 7 19	
				-

L₃ :水圧荷重がロックバーに作用する軸支持間距離 (添付 ロックバー装置組立図「SWT-7-005」参照)

$Z_7$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	48	12271

Z₇ : ロックバーの断面係数

ロックバーの断面係数を算定する。

(添付 ロックバー装置組立図「SWT-7-005」参照)

(機械工学便覧 基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)



 $Z_7 = (\pi/32) \cdot d^3 = (\pi/32) \times 50^3 = 12271.8463$ 

			$\Rightarrow$ 12271mm ³	(少数点以下第1位切下げ整数表示)
$A_6$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	49 1963	

A₆ : ロックバーの断面積

ロックバーの断面積を算定する。

(添付 ロックバー装置組立図「SWT-7-005」参照)

$$A_6=(\frac{\pi}{4}) \cdot d^2=(\pi/4) \times 50^2=1963.495408$$
  
⇒ 1963mm² (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)

n ₃ 本 本数 50 4
--------------------------

n₃ : 扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのロックボルトの本数 (添付 ロックバー装置組立図「SWT-7-005」参照)

$A_{b3}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	51)	157	

A_{b3} : ロックボルト1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

$$A_{b3} = 157 \text{mm}^2$$

$n_4$	本	本数	52) 15

n4 : 枠体を躯体に固定するアンカーボルトの本数
 (3.5 評価方法 (1) 応力算定 e. アンカーボルト 第3-11図参照)

- A_a
   mm²
   1本当たりの表面積
   53
   6535
- $A_a$ :アンカーボルト1本あたりの表面積 (コンクリート付着面積)  $A_a=d \cdot \pi \cdot L= 16x \pi x 130=6534.512719$  $= 6535 mm^2$  (少数点第1位四捨五入整数表示) ここで、 d:  $\phi$  16mm

φ 10.000

L=埋め込み長さ=130mm

$A_{b4}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	54)	157

A_{b4} : アンカーボルト1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

 $A_{b4}$ = 157mm²

評価対象部位	発生応力度	$(N/mm^2)$
扉板	55 216	5

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の扉板部の発生応力度は

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 a.扉板に生じる荷重を算定し,(2)断面検定 a.扉板より曲げ応力度 を算定する。 なお,扉板にせん断力は発生しない。

- (1) 応力算定
  - a. 扉板

扉板に生じる荷重は、津波に伴う荷重を考慮し、等変分布荷重及び 等分布荷重を受ける周辺固定支持の矩形板として、次式により算定する。 扉板に生じる荷重の例を第3-2図に示す。

扉板に発生するモーメントは,各評価区画扉部において、作用する荷重が台形 荷重となることから等分布荷重と不等分布荷重に分けることができる。このこと から,芯材による4辺固定における扉板の曲げモーメントは,等変分布荷重四辺 固定スラブ曲げモーメント式と不等分布重四辺固定スラブの曲げモーメント式 を足した次式であらわされる。以下に各区画の曲げモーメントを算出し、最も 大きくなる区画の数値を採用する。なお,算定式は,Mx説明添付図参照。

区画1:  $M_1=M_{x1} \cdot W_1 \cdot L_4^2+M_{x2} \cdot (W_2-W_1) \cdot L_4^2$  _____  $M_1$ : 区画1の扉板に発生する曲げモーメント  $M_1 = M_{X1} \cdot W_1 \cdot L_4^2 + M_{X2} \cdot (W_2 - W_1) \cdot L_4^2$ 区面2:  $M_2=M_{X3} \cdot W_2 \cdot L_4^2 + M_{X4} \cdot (W_3 - W_2) \cdot L_4^2$  _____ 区画3:  $M_3=M_{X5} \cdot W_3 \cdot L_4^2 + M_{X6} \cdot (W_4 - W_3) \cdot L_4^2$  $=0.074 \times 128.2 \times 0.515^{2}$ +0.  $042x(135.7-128.2)x0.515^{2}$ ここで、 Х =2.599682405 (kN·m) M_{x1}:等分布荷重による  $=2599682 (N \cdot mm)$ 曲げ応力算定用の係数(-) (少数点第1位四捨五入整数表示) W₁:区画上端の単位長さ当たりの ▶ M₂:区画2の扉板に発生する曲げモーメント 作業荷重(kN/m)  $M_2 = M_{X3} \cdot W_2 \cdot L_4^2 + M_{X4} \cdot (W_3 - W_2) \cdot L_4^2$ L₄:区間短辺の長さ(m)  $=0.072 \times 135.7 \times 0.515^{2}$ M_{x2}:等分布荷重による +0.  $042x(142, 7-135, 7)x0, 515^{2}$ 曲げ応力算定用の係数(-) W_d:区画下端の単位長さ当たりの =2.66933049 (kN·m) 作業荷重(kN/m)  $= 2669330 (N \cdot mm)$ (少数点第1位四捨五入整数表示)
※ →  $M_3$ : 区画3の扉板に発生する曲げモーメント  $M_3=M_{X5} \cdot W_3 \cdot L_4^{2}+M_{X6} \cdot (W_4-W_3) \cdot L_4^{2}$ =0.063x142.7x0.515² +0.038x(148.8-142.7)x0.515² =2.445878428(kN·m) =2445878(N·mm) (少数点第1位四捨五入整数表示)

M₂>M₁>M₃なので以降の検討は、

M=M₂= 2669330(N・mm)として検討します。



第3-2図 扉板に生じる荷重と区画の図

## (2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が,許容限界値以下であることを確認 する。なお,異なる荷重が同時に作用する部材については,組合せを考慮する。

a. 扉板

扉板に生じる曲げ応力度を算定し,扉板の短期許容応力度以下であることを確認 する。

$$\sigma = \frac{M}{Z_1}$$

ここで、

- M:扉板の曲げモーメント(N・mm)
- $Z_1: 扉板の断面係数(mm³)$

 $\sigma: 扉板に生じる曲げ応力度$  $<math>\sigma = \frac{M}{Z_1}$ = 2669330/12360=215.9652104 = 216(N/mm²) (小数点第一位切り上げ,整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
芯材	56 131

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材の発生応力度は 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法(1)応力算定 b. 芯材より発生応力を算定し,(2)断面検定 b. 芯材より応力度を算定 する。なお,ここでは芯材主桁及び縦桁のせん断,曲げにおいて発生 応力度結果が一番厳しい主桁の曲げの値を記載している。

- (1) 応力算定
  - b. 芯材

芯材に生じる荷重は、津波に伴う荷重を考慮し、荷重を負担する芯材の 取付方向(水平又は鉛直)に応じて、それぞれ算定する。水平方向に取付く主桁に ついては、等分布荷重を受ける両端支持の単純梁として次式により算定する。 鉛直方向に取付く縦桁については、扉に生じる荷重を算定し、各桁(中間主桁及 び端主桁)に分担することとし、次式により算定する。芯材に生じる荷重の

(a) 主桁

例を第3-3図に示す。

M=  $\frac{P_n + P_{n+1}}{2}$  ·  $\frac{a_n + a_{n+1}}{2} \frac{B_1^2}{8}$  → M: 主桁に作用する曲げモーメント 主桁に作用する荷重は, 受圧幅の 左右を支持点とした梁の両端支持等  $Q = \frac{P_n + P_{n+1}}{2} \cdot \frac{a_n + a_{n+1}}{2} \cdot \frac{B_1}{2}$ 分布荷重における曲げモーメントの Ж 公式であらわすことが出来る。 n₁の場合  $M_1 = \frac{P_n + P_{n+1}}{2} \cdot \frac{a_n + a_{n+1}}{2} \cdot \frac{B_1^2}{8}$ ここで、 B₁:受圧幅(m)  $=\frac{131.9+139.1}{2}$  x a1: 主桁ピッチ (m) a₂: 主桁ピッチ (m) a₃: 主桁ピッチ (m) = 135. 5x0. 72x0. 102152=9. 96594912 P₁:水圧荷重(kN/m²)  $= 9.966 (kN \cdot m)$ P₂:水圧荷重(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示) P₃:水圧荷重 (kN/m²)

n₂の場合 M₂= <u>P_n+P_{n+1}</u> · <u>a_n+a_{n+1}</u> <u>B₁²</u>

 $= \frac{139.1 + 145.7}{2} \times \frac{0.7 + 0.6}{2} \times \frac{0.904^2}{8}$  $= 142.4 \times 0.65 \times 0.102152 = 9.45518912$  $= 9.455 (\text{kN} \cdot \text{m})$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

※
 Q: 主桁に作用するせん断力
 主桁に作用する荷重は,受圧幅の
 左右を支持点とした梁の両端支持等
 分布荷重におけるせん断力の
 公式であらわすことが出来る。



 $M = a_n^2 \cdot \{ (P_{(1\sim3)} / (9\sqrt{3})) + (P_{(4\sim6)} / 8) \} \cdot c$  $Q=H_{\sigma} \cdot \{(P_1/3) + (P_2/2)\} \cdot c \longrightarrow \&1$ P₁= P'_{h2}−P'_{h1} → ※2 であることから、受圧高上下部を支  $P_2 = P'_{h3} - P'_{h2}$  — → ×3  $P_3 = P'_{h4} - P'_{h3} \longrightarrow X4$ → ※5  $P_4 = P'_{h1}$  $P_5 = P'_{h2}$ → ※6  $P_6 = P'_{h3}$ → ※7  $P'_{h1} = P_{h1} \cdot B_1 \longrightarrow 38$  $P'_{h2} = P_{h2} \cdot B_1$ → ※9  $P'_{h3} = P_{h3} \cdot B_1 \longrightarrow 10$  $P'_{h4} = P_{h4} \cdot B_1 \rightarrow \times 11$ 中間縦桁c=1/2,端縦桁c=1/4

→ M:縦桁に作用する曲げモーメント 縦桁に作用する荷重は、台形荷重 点とした梁の等分布荷重による曲げ モーメントと三角形荷重による曲げ モーメントを足し合わせた本式であ らわされる。ここでは、発生モーメ ントが厳しくなる中間縦桁(c=1/2) を算出する。

ここで、

a₁: 主桁ピッチ (m) (区画1の縦桁長さ a₂: 主桁ピッチ(m) (区画2の縦桁長さ a₃: 主桁ピッチ (m) (区画3の縦桁長さ P₁:区画1縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m) P₂: 区画2縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m) P₃:区画3縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m) P₄:区画1縦桁に作用する 等分布荷重 (kN/m) P5: 区画2縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m) P₆:区画3縦桁に作用する 等分布荷重 (kN/m) c:縦桁の作用荷重に対する係数(-)

中間縦桁  $M_3 = a_1^2 \cdot (\frac{P_1}{9x\sqrt{3}} + \frac{1}{3})$ (8) x(1/2) $= 0.5476 \times (0.436220203 + 14.4875) \times 0.5$ = 4.086114592  $= 4.086 (kN \cdot m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_{4} = a_{2}^{2} \cdot \left(\frac{P_{2}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{5}}{8}\right) \cdot c$$

$$= \boxed{(8)} / (8) x (1/2)$$

$$= 0.49x (0.404145188 + 15.3375) x (1/2)$$

$$= 3.856703071$$

$$= 3.857 (kN \cdot m)$$

= 2.96600853

$$= 2.966 (kN \cdot m)$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

端縦桁

$$M_{6} = a_{1}^{2} \cdot \left(\frac{P_{1}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{4}}{8}\right) \cdot c$$

$$= \boxed[(8)] \times (1/4)$$

$$= 0.5476x (0.436220203 + 14.4875) \times 0.25$$

$$= 2.043057296$$

$$= 2.043 (kN \cdot m)$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_{7} = a_{2}^{2} \cdot \left(\frac{P_{2}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{5}}{8}\right) \cdot c$$
  
= ______/8) } x (1/4)  
= 0. 49x (0. 404145188+15. 3375) x 0. 25  
= 1. 928351536

 $= 1.928 (kN \cdot m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_8 = a_3^2 \cdot \left(\frac{P_3}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_6}{8}\right) \cdot c$$
  
= _____/8) } x (1/4)  
= 0. 36x (0. 352825164+16. 125) x0. 25  
= 1. 483004265

= 1.483 (kN·m)



第3-3図 芯材に生じる荷重の例

Ж1

中間縦桁

Q:縦桁に作用するせん断力

曲げモーメント同様梁の等分布荷重によ るせん断力と三角形荷重によるせん断力を 足し合わせ本式であらわされる。ここでは, せん断力が厳しくなる中間縦桁(c=1/2)を 算出する。なお,中間縦桁と端縦桁の断面 積はその形状より=1/2にはならない。

- a₁: 主桁ピッチ(m)(区画1の縦桁長さ)
   a₂: 主桁ピッチ(m)(区画2の縦桁長さ)
- a₃: 主桁ピッチ(m) (区画3の縦桁長さ
- P₁: 区画1縦桁に作用する 三角形荷重(kN/m)

ここで、

- P₂: 区画2縦桁に作用する 三角形荷重(kN/m)
- P₃:区画3縦桁に作用する 三角形荷重(kN/m)
- P₄:区画1縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)
- P₅: 区画2縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)
- P₆:区画3縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)

c:縦桁の作用荷重に対する係数(-)

$$Q_{3} = a_{1} \cdot \left(\frac{P_{1}}{3} + \frac{P_{4}}{2}\right) \cdot c$$

$$= \boxed{22.2801666...} +57.95) \times (1/2)$$

$$= 22.28 (kN)$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_{4} = a_{2} \cdot \left(\frac{P_{2}}{3} + \frac{P_{5}}{2}\right) \cdot c$$
  
=  $\left[ \frac{1}{2} \right] x (1/2)$   
= 0.7x (2.1+61.35) x0.5  
= 22.2075  
= 22.21 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_{5} = a_{3} \cdot \left(\frac{P_{3}}{3} + \frac{P_{6}}{2}\right) \cdot c$$

$$= \boxed{2} / 2) x (1/2)$$

$$= 0.6x (1.8333...+64.5) x 0.5$$

$$= 19.9$$

$$= 19.9 (kN)$$

端縦桁

$$Q_{6} = a_{1} \cdot \left(\frac{P_{1}}{3} + \frac{P_{4}}{2}\right) \cdot c$$

$$= \boxed{(2)} x (1/4)$$

$$= 0.74x (2.2666...+57.95) x (0.25)$$

$$= 11.14008333\cdots$$

$$= 11.14 (kN)$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_7 = a_2 \cdot \left(\frac{P_2}{3} + \frac{P_5}{2}\right) \cdot c$$
  
= 2 (2) } x (1/4)  
= 0.7x (2.1+61.35) x (1/4)  
= 11.10375  
= 11.10 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_8 = a_3 \cdot \left(\frac{P_3}{3} + \frac{P_6}{2}\right) \cdot c$$
  
= _____/2) } x (1/4)  
= 0. 6x (1. 8333...+64.5) x 0. 25  
= 9. 95 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

Ж2

 ▶ P₁:区画1の縦桁に作用する三角形荷重 扉に作用する津波による静水圧荷重 (区画上部)から扉に作用する津波に よる静水圧荷重(区画下部)から差し引い た本式であらわすことが出来る。 P₁= P'_{h2}-P'_{h1}= 122.7-115.9=6.8(kN/m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

- Ж3
  - → P₂:区画2の縦桁に作用する三角形荷重 扉に作用する津波による静水圧荷重 (区画上部)から扉に作用する津波に よる静水圧荷重(区画下部)から差し引い た本式であらわすことが出来る。 P₂= P'_{h3}-P'_{h2}= 129.0-122.7=6.3(kN/m)
     (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

Ж4

 ▶ P₃:区画3の縦桁に作用する三角形荷重 扉に作用する津波による静水圧荷重 (区画上部)から扉に作用する津波に よる静水圧荷重(区画下部)から差し引い た本式であらわすことが出来る。 P₃= P'_{h4}-P'_{h3}= 134.5-129.0=5.5(kN/m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

## Ж5

 ▶ P₄:区画1の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する浸水静水圧荷重(区画上部)に 等しい。
 P₄=P'_{h1}=115.9(kN/m)

Ж6

 ▶ P₅:区画2の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する浸水静水圧荷重(区画上部)に 等しい。
 P₅= P'_{h2}=122.7(kN/m)

Ж7 ▶ P₆:区画3の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する浸水静水圧荷重(区画上部)に 等しい。  $P_6 = P'_{h3} = 129.0 (kN/m)$ Ж8 → P'_{h1}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (最上部)(kN/m)⑨に算出した扉に作用 する津波による静水圧荷重(上部)が扉幅 で作用するため次式で表すことが出来る。  $P'_{h1} = P_{h1} \cdot B_1 = 128.2 x0.904 = 115.8928$ = 115.9 (kN/m)(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示) Χ9 ▶ P'_{h2}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (中間上部)(kN/m)⑩に算出した扉に作 用する津波による静水圧荷重(上部)が扉 幅で作用するため次式で表すことが出来る。  $P'_{h2} = P_{h2} \cdot B_1 = 135.7 x0.904 = 122.6728$ = 122.7 (kN/m)(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

 ※10
 P'_{h3}: 扉に作用する津波による静水圧荷重 (中間下部)(kN/m)⑪に算出した扉に作 用する津波による静水圧荷重(上部)が扉 幅で作用するため次式で表すことが出来る。
 P'_{h3}= P_{h3}・B₁=142.7x0.904=129.0008
 = 129.0(kN/m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)
 ※11
 P'_{h4}: 扉に作用する津波による静水圧荷重 (最下部)(kN/m)⑫に算出した扉に作用 する津波による静水圧荷重(下部)が扉幅

で作用するため次式で表すことが出来る。

P' _{h4}= P_{h4} • B₁=148. 8x0. 904=134. 5152

$$= 134.5 \,(\text{kN/m})$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

(2) 断面検定

b. 芯材

芯材に生じる曲げ応力度及びせん断応力度を算定し、芯材の短期許容応力度以下で あることを確認する。



(小数点第一位切り上げ,整数表示)

端縦桁

 $\tau = \frac{Q_6}{A_3} = 11140/654 = 17.03363914$  $= 17 (N/mm^2)$ 

(小数点第一位切り上げ,整数表示)

評価対象部位	発生応力度	$(N/mm^2)$
ヒンジ板	57 22	

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジ板部の発生応力度は 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法(1)応力算定 c.(a) より算定する荷重から(2)断面検定c.(a)の検定式により発生応力度を算定する。 応力算定上、扉にかかる水圧荷重は上下2ヶ所のロックピンとヒンジ2ヶ所の 計4ヶ所でうけもつ、1/4の荷重がかかるものとして計算します。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部

ヒンジ部は、ヒンジ板、ヒンジピン、ヒンジボルト及びアンカーボルトで構成さ れており、次式により算定する水圧荷重から、各部材に発生する荷重を算定する。 ヒンジ部に生じる荷重の例を第3-4図に示す。



第3-4図 ヒンジ部に生じる荷重の例

(a) ヒンジ板

ヒンジ板に生じる荷重は、次式により算定する。ヒンジ板に生じる荷重の例を 第3-5図 に示す。(戸当り側のヒンジは上下2ヶ所、1ヶ所当りヒンジ板は2枚)

Q= Rog 2 -

→ Q:ヒンジ板に発生する水平荷重による

ここで、

せん断力

Q=  $\frac{\text{Rog}}{2}$  =69. 42/2=34. 71 (kN)

Q:せん断力(kN)

Rog:水平荷重(kN)



第3-5図 ヒンジ板に生じる荷重の例

(2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が、許容限界値以下であることを確認する。 なお、異なる荷重が同時に作用する部材については、組合せを考慮する。

- c. ヒンジ部
- (a) ヒンジ板

ヒンジ板に生じるせん断応力度がヒンジ板の短期許容応力度以下であることを 確認する。

$\tau = \frac{Q}{A_4}$	▶ τ : ヒンジ板に作用する水圧によるせん断
Т	応力度
ここで、	$\tau = \frac{Q}{A_4} = 34.71/1600 = 0.021694 (kN/mm^2)$
$\tau$ : せん断応力度 $(N/mm^2)$	= 21.694 (N/mm ² )
Q: せん断力(kN)	$= 22  (\text{N/mm}^2)$
A ₄ :断面積(mm ² )	(小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジピン	58 250

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジピン部の発生応力度は

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(b)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(b)の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部
  - (b) ヒンジピンヒンジピンに生じる荷重は、次式により算定する。ヒンジピンに生じる荷重の例を第3-6図に示す。



- (2) 断面検定
  - c. ヒンジ部
  - (b) ヒンジピン

ビンジピンに生じる曲げ応力度及びせん断応力度を次式により算定し、ビンジ ピンの短期許容応力度以下であることを確認する。



(小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジボルト (枠体側)	59 111

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルト部(枠体側)の発生応力度は、 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(c)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(c)の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部
  - (c) ヒンジボルト(枠体側)

ヒンジボルト(枠体側)には水圧により引張力がかかる、次式により算定する。 ヒンジボルトに生じる荷重の例を第3-7図に示す。

$$T=Rog= \sqrt{\left(\frac{P_0}{4}\right)^2 + Rr^2} \longrightarrow T: Eンジボルト(枠体側) に発生する荷重は、水圧により引張力として発生することから次式より求める。ここで、T:引張力(kN) T=Rog=  $\sqrt{\left(\frac{P_0}{4}\right)^2 + R_r^2} = \sqrt{(277.5/4)^2 + 2.045^2}$   
Rog:水平荷重(kN) =69.4182  
Po:水圧荷重(kN) =69.42(kN)  
R_r:扉自重反力(kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)$$



第3-7図 ヒンジボルト(枠体側)に生じる荷重の例

(2) 断面検定

- c. ヒンジ部
- (c) ヒンジボルト(枠体側)

ヒンジボルト(枠体側)に生じる引張応力度を次式により算定し、ヒンジボルト の短期許容応力度以下であることを確認する。

$\sigma_{T} = \frac{T}{T}$	——— σ _T :ヒンジボルト(枠体側)に作用
$n_1 \cdot A_{b1}$	する水圧による引張応力度
ここで、	$\sigma_{\rm T} = \frac{\rm T}{\rm n_1 \cdot A_{\rm b1}}$
σ _T :引張応力度(N・mm ² )	$=\frac{69.42}{105414}$ (kN · mm ² )
T:引張力(kN)	4x157 0.1100414(KK) mm/
n ₁ :ヒンジボルト本数(本)	$= 111 (\text{N} \cdot \text{mm}^2)$
A _{b1} :1本当たりの断面積(mm ² )	(小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジボルト (扉側)	60) 111

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルト部(扉側)の発生応力度は、 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(d)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(d)の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部
  - (d) ヒンジボルト (扉側)

ヒンジボルト(扉側)には水圧により引張力がかかる、次式により算定する。 ヒンジボルトに生じる荷重の例を第3-8図に示す。

 $Q=Rog= \sqrt{\left(\frac{P_0}{4}\right)^2 + Rr^2} \longrightarrow Q: Eンジボルト (扉側) に発生する$ 荷重は、水圧により引張力として発生することから次式より求める。ここで、 $Q: せん断力(kN) Q=Rog= <math>\sqrt{\left(\frac{P_0}{4}\right)^2 + R_r^2} = \sqrt{(277.5/4)^2 + 2.045^2}$ Rog: 水平荷重(kN) =69.4182 Po: 水圧荷重(kN) =69.42(kN) R_r: 扉自重反力(kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-8図 ヒンジボルト(扉側)に生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - c. ヒンジ部
  - (d) ヒンジボルト (扉側)

ヒンジボルト(扉側)に生じるせん断応力度を次式により算定し、ヒンジボルトの 短期許容応力度以下であることを確認する。

$\tau = \frac{Q}{Q}$ –	——— τ : ヒンジボルト(扉側)に作用する
$n_2 \cdot A_{b2}$	水圧によるせん断応力度
	$\tau = \frac{\mathbf{Q}}{\mathbf{n}_2 \cdot \mathbf{A}_{b2}}$
τ : せん断応力度(N・mm ² )	$=\frac{69.42}{105414}$ = 0.1105414 (kN · mm ² )
Q:せん断力(kN)	4x157 4x157
n ₂ :ヒンジボルト本数(本)	$= 111 (\text{N} \cdot \text{mm}^2)$
$A_{b2}:1$ 本当たりの断面積(mm ² )	(小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ロックバー	61) 108

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックバー部の発生応力度は 添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定d.(a)より 算定する荷重から(2)断面検定d.(a)の検定式により発生応力度を算定する。

応力算定上、扉にかかる水圧荷重は上下2ヶ所のロックピンとヒンジ2ヶ所の 計4ヶ所でうけもつ、1/4の荷重がかかるものとして計算します。

- (1) 応力算定
  - d. ロックバー部

ロックバー部は、ロックバー及びロックボルトで構成されており、次式により算定 する水圧荷重から、各部材に発生する荷重を算定する。

ロックバー部に生じる荷重の例を第3-9図に示す。

$$Rog=\frac{P_0}{4}$$
 Rog:ロックバー部に作用する水平荷重

ここで、 Rog:水平荷重(kN) Po:水圧荷重(kN)  $Rog = \frac{P_0}{4} = 277.5/4$ =69.375 =69.38 (kN)



第3-9図 ロックバー部に生じる荷重の例

(a) ロックバー

ロックバーに生じる応力は、次式により算定する。ロックバーに生じる荷重の例 を第3-10図に示す。

 $M=Rog \cdot L_3$ 

M:ロックバー部に発生する水圧による曲 げモーメント

ここで、

M:曲げモーメント(kN・m) Rog:水平荷重(kN) L₃:作用点間距離(mm) =1.31822(kN・m) =1318(kN・mm) (存執数字伝見四論玉み存執数字4編=

 $M=Rog \cdot L_3=69.38x0.019$ 



第3-10図 ロックバー部に生じる荷重の例

## (2) 断面検定

- d. ロックバー部
- (a) ロックバー

ロックバーに生じる曲げ応力度は、次式により算定し、ロックバーの 短期許容応力度以下であることを確認する。

$$\sigma = \frac{M}{Z_7} \longrightarrow \sigma : □ \lor p / v - ic 作用する曲げ応力度$$

$$\sigma = \frac{M}{Z_7}$$

$$\sigma : x E ic s 3 応 力 g (N/mm^2) = 0.1074077 (kN \cdot mm^2)$$

$$M : 曲 if モーメン \land (kN \cdot mm) = 107.4077 (N \cdot mm^2)$$

$$z_7 : 断 面 係 数 (mm^3) = \frac{108 (N \cdot mm^2)}{(小 数 点 以 下 第1 位 切 上 if 整 数 表 \pi)}$$

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ロックボルト	62 111

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックボルト部の発生応力度は 添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定b.(b)より 算定する荷重から(2)断面検定d.の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - d. ロックバー部
  - (b) ロックボルト
     ロックボルトには水圧により引張力がかかる次式により算定する。
     ロックボルトに生じる荷重の例を第3-11図に示す。

T=Rog= <u>P</u>	▶ T: ロックボルトに発生する
0	荷重は、水圧により引張力として
ここで、	発生することから次式より求める。
T:引張力(kN)	
Rog:水平荷重(kN)	$T = Rog = \frac{P_0}{4} = 277.5/4$
Po:水圧荷重(kN)	=69. 375
	=69. 38 (kN)
	(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-11図 ロックボルトに生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - d. ロックバー部
  - (b) ロックボルト

ロックボルトに生じる引張応力度を次式により算定し、ロックボルトの 短期許容応力度以下であることを確認する。



評価対象部位	発生応力度(kN)
アンカーボルト	63 19

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のアンカーボルトの発生応力度は 添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 e.アンカ ーボルトより算定する荷重から、(2)断面検定 e.アンカーボルトの検定式により 発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - e. アンカーボルト

アンカーボルトは、枠体を躯体に固定している。扉体に生じる水平荷重が枠体 に伝わるとして、各アンカーボルトに発生する荷重を次式により算定する。 アンカーボルトに生じる荷重の例を第3-12図に示す。



(小数点以下第1位切上げ整数表示)



第3-12図 アンカーボルトに生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - e. アンカーボルト

(1)応力算定で算定したT:荷重を、アンカーボルト1本当たりに生じる引張力 とする。

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
扉板	64 235

扉板の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

•	材質

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の扉板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101:2015」P26より

降伏点 235N/mm²、引張強さ 400N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (235, 400x0.7) = $235 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、235 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
芯材	65 235

芯材の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

材質:

・板厚 t

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101:2015」P26より

降伏点 235N/mm²、引張強さ 400N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (235, 400x0.7) = $235 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、235 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界值(N/mm ² )
ヒンジ板	66 118

ヒンジ板の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジ板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) =205 (N/mm²)

せん断許容応力度は、F=205/√3になるので、

許容限界値は、118 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ヒンジピン	67 345

ヒンジピンの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

 材質: 直径:

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジピンの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 345N/mm²、引張強さ 690N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度 F 値は、降伏点(耐力) 及び引張強さの70% のどちらか小さい値より

F=MIN  $(345, 690 \times 0.7) = 345 (\text{N/mm}^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、345 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値	$(N/mm^2)$
ヒンジボルト (枠体側)	68 20	5

ヒンジボルト(枠体側)の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルト(枠体側)の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) =205 (N/mm²)

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、205 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ヒンジボルト (扉側)	69 118

ヒンジボルト(扉側)の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

```
・材質
```

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルト(扉側)の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度 F 値は、降伏点(耐力) 及び引張強さの70% のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) =205 (N/mm²)

せん断許容応力度は、F=205/√3になるので、

許容限界値は、<u>118 (N/mm²)</u>

評価対象部位	許容限界值(N/mm ² )
ロックバー	70 345

ロックバーの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

•	材質	
•	直径	

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックバーの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 345N/mm²、引張強さ 690N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN  $(345, 690 \times 0.7) = 345 (\text{N/mm}^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、345 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ロックボルト	71) 205

ロックボルトの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

材質:

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックボルトの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) =205 (N/mm²)

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、205 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界值(kN)
アンカーボルト	72 26

アンカーボルトの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質: ・サイズ_____

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のアンカーボルトの短期許容引張力を算出し許容限界値とする。 P_a=P_{a1} or P_{a3}(どちらかの小なる値) → P_a:アンカーボルトの短期許容引張力 「各種合成構造設計指針・同解説 ここで、 日本建築学界2010」P45 接着系アンカーボルトの設計より Pa: 短期許容引張力(kN)  $P_{a1} = \phi_1 \cdot \sigma_{a} \cdot \sigma_{a}$  $= 1 \times 205 \times 157 = 32185$  (N) = 32.185 (kN)= 32 (kN)(小数点以下第1位切下げ整数表示) ここで 表4 低減係数 sσna:接着系アンカーボルトの規格降伏点 アンカーボルト仕様 SUS304, M16より 「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」 P1213より 耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm² から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より 基準強度 F 値は、降伏点(耐力) 及び 引張強さの70%のどちらか小さい値より F=MIN (205, 520x0.7) = $205 (N/mm^2)$ ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5とな り、短期に生じる応力は、1.5倍とする ことから許容限界値は、205 (N/mm²) これを降伏点とする。

$$s_{c}a: 基礎アンカーボルトの断面積P30 Ab4: アンカーボルト1本あたりの有効断面積よりs_ea= Ab4=157 (mm2)Pa3=(2/3)・ $\tau_{a}$ ·  $\pi$ ·  $d_{a}$ ·  $1_{ce}$   
= (2/3) x8. 207x3. 141592x16x98  
= 26951. 88 (N)  
= 26 (kN)  
(小数点以下第1位切下げ整数表示)  
ここで  
 $\tau_{a}: \sim 0$  あきを考慮した接着系アンカー  
ボルトの引張力に対する付着強度  
 $\tau_{a}$ =  $a_{1}$ ·  $a_{2}$ ·  $a_{3}$ ·  $10 \sqrt{F_{c}/21}$   
= 0. 80x1x1x10  $\sqrt{22. 1/21}$   
= 8. 20685  
= 8. 207 (N/mm²)  
(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)  
 $a_{n}: \sim 0$  あき寸法を考慮した低減係数  
 $a_{n}: 0.5(\frac{C_{n}}{1e})$ +0. 5=0. 5x1+0. 5=1  
 $C_{n}: \sim 0$  あき寸法  $(\frac{C_{n}}{1e}) \ge 1$ より1  
 $1_{e}: \tau > \pi \rightarrow \pi \pi \nu \wedge 0$ 有効埋込み長き  
160 (mm)  
 $a_{1}$ = 0.5  $(\frac{C_{n}}{1e})$ +0. 5=0. 5x (80/130) +0. 5  
= 0. 807692  
= 0. 80  
(少数点以下第3位切下げ少数点第2位表示)  
 $a_{2}$ = 0.5  $(\frac{C_{n}}{1e})$ +0. 5=0. 5x (130/130) +0. 5  
= 1. 080769  
= 1$$



F_c:コンクリート付着強度
 3.4 許容限界(2) b 第3-6表
 アンカーボルトの許容限界より
 22.1(N/mm²)
 d_a:アンカーボルトの径 φ16(mm)
 1_{ce}:アンカーボルトの強度算定用埋込み長さ
 1_{ce}=1_e-2d_a=130-2x16=98(mm)

 $P_{a1}: 30 (kN) > P_{a3}: 26 (kN)$ なので、Pa=26 (kN)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
扉板	73 0.92

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の扉板の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

から

216/235=0.919149

⇒0.92 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
芯材	74 0.56

原子炉建屋付属棟北側水密扉1の芯材の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

131/235=0.5574468

⇒0.56 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジ板	75 0.19

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジ板の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

22/118=0.186440678

⇒0.19 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジピン	76 0.73

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジピンの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

249/345=0.72173913

⇒0.73 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジボルト (枠体側)	77) 0. 55

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出す。 発生応力度/許容限界値より

111/205=0.541463414

⇒ 0.55 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジボルト (扉側)	78 0.95

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のヒンジボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出す。 発生応力度/許容限界値より

111/118=0.940677966

⇒0.95 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ロックバー	79 0.32

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックバーの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

108/345=0.313043478

⇒0.32 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ロックボルト	80 0.55

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のロックボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出す。 発生応力度/許容限界値より

111/205=0.541463

⇒0.55 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
アンカーボルト	81) 0.74

原子炉建屋付属棟北側水密扉1のアンカーボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出 発生応力度/許容限界値より

19/26=0.73077

=0.74 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)
水密扉の強度計算書(数値根拠書) (原子炉建屋付属棟南側水密扉)

## 1. 評価条件

「3.5 評価方法」に用いる評価条件を第3-7表に示す。

対				数 値
象 部 位	記号	単 位		原子炉建屋付属棟南側水密扉
	$L_4$	m	区画短辺の長さ	
	$W_1$	kN/m	最上段部の単位長さ 当たりの作用荷重	2 125.1
	$\mathrm{W}_2$	kN/m	中段上部の単位長さ 当たりの作用荷重	③ 134.1
	$W_3$	kN/m	中段下部の単位長さ 当たりの作用荷重	④ 142.7
扉	$W_4$	kN/m	最下段部の単位長さ 当たりの作用荷重	⁽⁵⁾ 148.8
	$M_{X1}$	-	区画1等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	6 0.081
板	$M_{X2}$	_	区画1等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	⑦ 0.047
	$M_{X3}$	_	区画2等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	8 0.078
	$M_{X4}$	_	区画2等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	(9) 0.045
	$M_{X5}$	-	区画3等分布荷重に よる曲げ応力算定用 の係数	0.063
	M _{X6}	-	区画3等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	1 0.038
	Z ₁	mm ³	断面係数	12240

第3-7表 強度評価に用いる条件(1/4)

対象       近日       単位       定義       数値         常       記号       単位       定義       数値         開       用       空圧高       ③       原子炉建屋付属棟南側/         日       用       受圧幅       ④       125.1         水/m       津波による静水圧荷重       ⑤       125.1         花材       P _{h1} kN/m ² 津波による静水圧荷重       ⑥       134.1         上       P _{h2} kN/m ² 津波による静水圧荷重       ⑥       134.1         上       P _{h2} kN/m ² 津波による静水圧荷重       ⑥       142.7         P _{h3} kN/m ² 津波による静水圧荷重       ⑦       148.8         Z ₂ mm ³ 断面係数       ⑨       461050         A ₁ mn ² 断面積       ⑩       148.8         Z ₂ mm ³ 断面積       ⑩       1408         A ₁ 車主桁ピッチ       ⑨       461050       1408         A ₁ m       主桁ピッチ       ⑨       1408 <th>=1 =7</th>	=1 =7					
対					数值	
象 部 位	記号	単 位	定義	原子	·炉建屋付属棟南側水密扉	
	Hg	m	受圧高	13		
	B ₁	m	受圧幅			
	P _{h1}	$kN/m^2$	津波による静水圧荷重 (最上部)	15	125. 1	
芯材(主桁)	P _{h2}	$kN/m^2$	津波による静水圧荷重 (中間上部)	16	134. 1	
	P _{h3}	$kN/m^2$	津波による静水圧荷重 (中間下部)	142.7		
	P _{h4}	$kN/m^2$	津波による静水圧荷重 (最下部)	18	148.8	
	$Z_2$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	19	461050	
	A ₁	$\mathrm{mm}^2$	断面積	20	1408	
	al m		主桁ピッチ	21)		
	a2	m	主桁ピッチ	22)		
	a3	m	主桁ピッチ	23		
*	Y	m	縦桁ピッチ	24)		
材	p1	$kN/m^2$	津波による水圧荷重	25	129.6	
(縦	p2	$kN/m^2$	津波による水圧荷重	26	138.4	
桁	p3	$kN/m^2$	津波による水圧荷重	27)	145.8	
	$Z_3$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	28	75637	
	$Z_4$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	29	192599	
	$A_2$	$\mathrm{mm}^3$	断面積	30	1719	
	$A_3$	$\mathrm{mm}^3$	断面積	31)	1335	

第3-7表 強度評価に用いる条件(2/4)

対象部位		記号	単 位	定義		数 値
		W _X	kN	扉体自重	32	
ţ	ŕ	Ро	kN	水圧荷重	33)	477.5
通		R _r	kN	ヒンジ部にかかる 扉自重反力	34)	4.387
共 通	共通	L _r	m	扉体重心~ヒンジ中 心間距離	35)	
	Lj	m	ヒンジ中心間距離	36)	1.745(1745mm)	
	15	$Z_5$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	37)	16666
	1)X	$A_4$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	38)	2000
ピン ヒンジボルト ヒンジボルト	۲°	$L_2$	mm	軸支持間距離	39	140
		$B_2$	mm	ブッシュ長さ	40	90
	ン	Z ₆	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	41)	6283
	$A_5$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	42)	1257	
	ヒンジ	n ₁	本	本数	43)	4
	ボルト	$A_{b1}$	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの断面積 (M16)	44)	157
	ヒ ン( ジ扉	n ₂	本	本数	45	4
	ボ側 ル ト	A _{b2}	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの断面積 (M20)	46	245

第3-7表 強度評価に用いる条件(3/4)

対象部位	記号	単 位	定義	数值	
ロッ	$L_3$	mm	作用点間距離	47) 19	
ク	$Z_7$	mm ³	断面係数	48) 12271	
	A ₆	$\mathrm{mm}^2$	断面積	49 <b>1963</b>	
ロック	n ₃	本	本数	50 4	
ボルト	$A_{b3}$	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの断面積 (M16)	<u>51</u> 157	
アン	$n_4$	本	本数	52) 14	
カ ー ボ	A _a	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの表面積 (M20)	53) 10053	
ルト	A _{b4}	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの断面積 (M20)	⁵⁴ 245	

第3-7表 強度評価に用いる条件(4/4)

## 2. 強度評価結果

原子炉建屋水密扉の強度評価結果を第4-1表に示す。水密扉の各部材の断面検定を行った 結果,発生応力度又は荷重は許容限界値以下である。

夕 敌	亚研究在动	発生応力度	許容限界値	<u> </u>	
	泊 你	$(N/mm^2)$	$(N/mm^2)$	光土心刀皮/可存限/	
原子炉建 屋付属棟	扉板	55 231	64) 235	(73) 0.99	
南側 水密扉	芯材(注1)	56 80	65) 235	74) 0.35	

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(1/3)

(注1) 主桁及び縦桁のせん断及び曲げのうち評価結果が最も厳しくなる中間縦桁区画1 の曲げによる値を記載

名称	評価対	発生 応力度 (N/mm ² )	許容 限界値 (N/mm ² )	発生応力 度/許容 限界値	
原子炉建屋付属棟 南側水密扉		板	57 20	66 118	75 0. 17
	ヒンジ部	ピン ^(注1)	58 302	67 345	76 <b>0.</b> 88
		ヒンジボルト (枠体側)	59 127	68 205	77 0.62
		ヒンジボルト (扉側)	60 82	69 118	<ul><li>(78)</li><li>(8)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li><li>(78)</li>&lt;</ul>
	ロックバー	ロックバー	61 185	70 345	⁷⁹ 0. 54
	部	ロックボルト	62 191	<ol> <li>205</li> </ol>	80 0.94

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(2/3)

(注1) せん断及び曲げのうち評価結果が厳しくなる曲げによる値を記載

第4-1表 原子炉建屋水密扉の強度評価結果(3/3)

名称	評価対象部位	発生 応力(kN)	許容 限界値 (kN)	発生応力 度/許容 限界値
原子炉建屋付属棟 南側水密扉	アンカーボルト	63) 35	72 39	81) <b>0.90</b>

$L_4$	m	区画短辺の長さ	1)	0.510	

L₄:原子炉建屋付属棟南側水密扉の扉体の区画短辺の長さ

該当部位は、添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

W ₁	kN/m	最上段部の単位長さ 当たりの作用荷重	2	125. 1
----------------	------	-----------------------	---	--------

W₁:原子炉建屋付属棟南側水密扉の最上段部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₁=Ph'

ここで

Ph':最上段部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' = ρ · g · h = 1.03×9.80665×12.385=125.0990211=125.1(kN/m) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(最上段部高さ)図より=12.385(m)

$W_2$ kN/m 半校工前の単位及び ③ 134.1 当たりの作用荷重 ③ 134.1
--------------------------------------------------

W2:原子炉建屋付属棟南側水密扉の中段上部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₂=Ph'

ここで

Ph':中段上部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 13.28 = 134.1392814 = 134.1 (k N/m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(中段上部高さ)図より=13.28(m)

$W_3$	kN/m	中段下部の単位長さ 当たりの作用荷重	4	142.7	
-------	------	-----------------------	---	-------	--

₩3:原子炉建屋付属棟南側水密扉の中段下部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₃=Ph'

ここで

Ph':中段下部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 14.13 = 142.7250034 = 142.7 (k N/m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g : 重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(中段下部高さ)図より=14.13(m)

$W_4$	kN/m	最下段部の単位長さ 当たりの作用荷重	5	148.8	
-------	------	-----------------------	---	-------	--

W4:原子炉建屋付属棟南側水密扉の最下段部の単位長さ当たりの作用荷重



添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より W₄=Ph'

ここで

Ph':最下段部の津波による単位長さ当たりの静水圧荷重

Ph' =  $\rho \cdot g \cdot h = 1.03 \times 9.80665 \times 14.73 = 148.7855131 = 148.8 (k N/m)$ 

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(最下段部高さ)図より=14.73(m)

M _{X1} 三         区画1等分布荷重に よる曲げ応力算定用         6         0.081           の係数         の係数         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0         0	
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

Mx1:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画1等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



M _{X2} –	区画1等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	0.047
-------------------	--------------------------------	-------

M_{x2}:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画1等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



図-5.2 等変分布荷重時四辺固定スラブの曲げモーメントとたわみ (v=0)

M _{X3} 三         区画2等分布荷重に よる曲げ応力算定用 ⑧         0.078           の係数         の係数         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078         0.078
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

M_{X3}:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画2等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



$M_{X4}$	-	区画2等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	9	0.045	
----------	---	--------------------------------	---	-------	--

M_{x4}:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画2等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



図-5.2 等変分布荷重時四辺間定スラブの出げモーメントとたわみ (v=0)

M _{x5} - よる曲げ応力算定用 ⑩ 0.063	M _{X5} – よる曲げ応力算定用 ⑩ 0.063
の係数	の係数

M_{x5}:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画3等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



M _{X6}	_	区画3等変分布荷重 による曲げ応力算定 用の係数	11	0.038	
-----------------	---	--------------------------------	----	-------	--

M_{x6}:原子炉建屋付属棟南側水密扉の区画3等分布荷重による曲げ応力算定用の係数



Z1         mm ³ 断面係数         12         12240
----------------------------------------------------------

Z₁:原子炉建屋付属棟南側水密扉、扉板の断面係数 扉板の断面係数を算定する。



H _g m	受圧高(	13
------------------	------	----

Hg:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材の受圧高

当該部分は、添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

B ₁	m	受圧幅	14	

B₁:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材の受圧幅

当該部分は、添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

P _{h1}	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(最上部)	15	125.1
-----------------	----------	---------------------	----	-------

Ph1:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)に作用する津波による

静水圧荷重(最上部)添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より

b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph=\rho \bullet g \bullet h$ 

最上部静水圧荷重算定のため,

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より

ρ:水の密度1.03 (t/m³)

水圧作用高さEL.8.2 (m)

g:重力加速度9.80665 (m/s²)

h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=12.385m

 $P_{h1} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 12.385$ 

- = 125.0990211
- = 125.1(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$P_{h2}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(中間上部)	16	134.1
----------	----------	----------------------	----	-------

P_{h2}:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)に作用する津波による 静水圧荷重(中間上部)添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より

b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph=\rho \cdot g \cdot h$ 

- 中間上部静水圧荷重算定のため,
- 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より
  - $\rho : 水の密度1.03 (t/m³)$ 
    - 水圧作用高さEL.8.2 (m)
  - g:重力加速度9.80665 (m/s²)
  - h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=13.28m

 $P_{h1} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 13.28$ 

- = 134.1392814
- = <u>134.1(kN/m²)</u> (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$P_{h3}$	$kN/m^2$	津波による静水圧荷 重(中間下部)	17	142.7
----------	----------	----------------------	----	-------

Ph3:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)に作用する津波による

静水圧荷重(中間下部)添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.3 荷重及び荷重の組合せ(1)より b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

 $Ph=\rho \bullet g \bullet h$ 

中間下部静水圧荷重算定のため,

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より

 $\rho$ :水の密度1.03  $(t/m^3)$ 

水圧作用高さEL.8.2 (m)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.13m

 $P_{h3} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 14.13$ 

- = 142.7250034
- = <u>142.7(kN/m²)</u> (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

P _{h4} kN/m ² 津波による静水圧荷 重(最下部) ¹¹ 148.8	
---------------------------------------------------------------------------	--

P_{h4}:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)に作用する津波による静水圧荷重(最下部) 添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照。

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 (1)荷重の設定

b. 津波に伴う荷重(Ph)算定式より

Ph= $\rho \cdot g \cdot h$ 

- 最下部静水圧荷重算定のため,
- 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 第3-2表より
  - $\rho$ :水の密度1.03 (t/m³)
    - 水圧作用高さEL.8.2 (m)
  - g:重力加速度9.80665 (m/s²)
  - h:当該部分の浸水深さ(区画上端高さ)図より=14.73m
- $P_{h4} = \rho \cdot g \cdot h=1.03 \times 9.80665 \times 14.73$ 
  - = 148.7855131
  - = 148.8(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

Z2         mm ³ 断面係数         19         461050
-----------------------------------------------------------

Z₂ : 芯材の断面係数

 $= 1408 \,(\text{mm}^2)$ 

芯材(主桁)の断面係数を算定する。

ここでは、主桁強度評価結果で用いた中間主桁の断面係数を記載する。





 A1
 mm
 阿面積

 A1
 : 芯材(主桁)の断面積

 ここでは,強度評価において負担する強軸側の面積(ウェブ部)を算定する。

 A1=(200-12-12) x8

al	m	主桁ピッチ	21)
a1:原	子炉建屋付	「属棟南側水密扉、	、芯材(横桁)の主桁ピッチ
当該普	部分は,以「	下のとおり。	
a2	m	主桁ピッチ	22
a2 a2:原	m 子炉建屋付	主桁ピッチ 「属棟南側水密扉、	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	主桁ピッチ ・属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材(横桁)の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 郡分は,以 ⁻	主桁ピッチ 「属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材(横桁)の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	主桁ピッチ 「属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材(横桁)の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	主桁ピッチ 「属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材(横桁)の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以	主桁ピッチ ・属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材(横桁)の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	主桁ピッチ ・属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 郡分は,以 ⁻	<u>主</u> 桁ピッチ ・ 属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 郡分は,以 ⁻	主桁ピッチ ・属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	<u></u> 予炉建屋付 部分は,以 ⁻	主桁ピッチ ・属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該書	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	<u>主</u> 桁ピッチ 「属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該書	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	<u>主</u> 桁ピッチ 「属棟南側水密扉、 下のとおり。	<u>2</u> 、芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該部	m 子炉建屋付 部分は,以 ⁻	主 桁 ピ ッ チ ・ 属 棟 南 側 水 密 扉、 下 の と お り 。	22 . 芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該部	m 子炉建屋付 郡分は,以	<u>主</u> 桁ピッチ ・ 属棟南側水密扉、 下のとおり。	22 . 芯材 (横桁) の主桁ピッチ
a2 a2:原 当該普	m 子炉建屋付 郡分は,以	<u>主</u> 桁ピッチ ・ 属棟南側水密扉、 下のとおり。	<ul> <li>②</li> <li>①</li> <li>①</li> <li>①</li> <li>①</li> <li>①</li> <li>○</li> <li>○</li></ul>

a3	m	主桁ピッ	ッチ	23			
a3:原	子炉建屋付	甘属棟南側水額	密扉、芯	材(横桁)	の主桁ピ	ッチ	
当該普	部分は,以	下のとおり。					
Y	m	縦桁ピッ	ッチ	24)			
Y a:原于	m 子炉建屋付,	縦桁ピッ 属棟南側水密	ッチ ·扉、芯林	²⁴ オ(縦桁)	の縦桁ピッ	] 1F	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピ _ン 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ 扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 1F	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付, 邓分は,以 ⁻	縦桁ピッ 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ 「扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 1F	
Y a:原∃ 当該書	m 子炉建屋付, 部分は,以 ⁻	縦桁ピッ 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ 「扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以 ⁻	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ 「扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] /F	
Y a:原∃ 当該部	m 子炉建屋付, 部分は,以 ⁻	縦桁ピ 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ i扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] /F	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以 ⁻	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	ッチ 「扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	<b>]</b> パチ	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ 扉、芯林	④ 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 1F	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ 扉、芯林	24 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ 「扉、芯林	24 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原于 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ :扉、芯林	到 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ ·扉、芯林	到 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 邓分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ ·扉、芯林	到 才(縦桁)	の縦桁ピッ	] 17	
Y a:原子 当該部	m 子炉建屋付, 部分は,以	縦桁ピュ 属棟南側水密 下のとおり。	yチ ·扉、芯林	24 才 (縦桁)	の縦桁ピッ	] /F	

p1	$kN/m^2$	津波による水圧有	<b>苛重</b> 25	129.6	

p1:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)下図に作用する荷重 評価作用位置における津波による荷重

- p1= ρ g h= 1.03x9.80665x12.8325=129.619152
  - = 129.6(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=12.8325(m)



主桁に生じる荷重の例

p2	$kN/m^2$	津波による水圧有	<b>苛重</b> 26	138.4	

p2:原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材(主桁)下図に作用する荷重 評価作用位置における津波による荷重

- p2= ρ g h= 1.03x9.80665x13.705=138.432142
  - = 138.4(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=13.705(m)



主桁に生じる荷重の例

p3	$kN/m^2$	津波による水圧荷	<b>5重</b> 27	145	5.8	
p3:原	子炉建屋付	甘属棟南側水密扉、	芯材	(主桁)	下図に作用	- 目する荷重

評価作用位置における津波による荷重

- p3= ρ · g · h= 1.03x9.80665x14.43=145.7552583
  - = 145.8(kN/m²) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

ここで、

第3-2表よりρ:水の密度1.03 (t/m³)

- g:重力加速度9.80665 (m/s²)
- h:当該部分の浸水深さ図より=14.43(m)



主桁に生じる荷重の例

$Z_3$	$\mathrm{mm}^3$	断面係数	28	75637

Z₃ : 芯材(中間縦桁)の断面係数を算定する。

ここでは、主桁強度評価結果で用いた中間縦桁の断面係数を記載する。



$$e_{1} = d - \frac{d^{2} \cdot t + s^{2} \cdot (b - t)}{2 \cdot (b \cdot s + h \cdot t)} = 200 - \frac{200^{2} x 9 + 9^{2} x (50 - 9)}{2 x (50 x 9 + 191 x 9)}$$

$$= 200 - \frac{363321}{4338} = 116.246888$$

= 116.2(mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$e_{2} = \frac{d^{2} \cdot t + s^{2} \cdot (b - t)}{2 \cdot (b \cdot s + h \cdot t)} = \frac{200^{2} x 9 + 9^{2} x (50 - 9)}{2 x (50 x 9 + 191 x 9)}$$
$$= \frac{363321}{4338} = 83.75311203$$

= 83.75(mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$I = \frac{1}{3} \cdot \{t \cdot e_1^{3} + b \cdot e_2^{3} - (b-t) \cdot (e_2 - s)^{3}\}$$
  
= 1/3x {9x116. 2³+50x83. 75³-(50-9) x (83. 75-9)³}  
= 1/3x {14120851. 75+29371386. 72-17124482. 17}=1/3x26367756. 3=8789252. 1  
= 8789000 (mm) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Z_3 = \frac{1}{e_1} = 8789000/116.2 = 75636.83305$$
  
=  $\overline{75637(\text{mm}^3)}$  (小数点第一位切り上げ,整数表示)

$Z_4$		n	$m^2$		断面積	29)	192599
 $Z_4$	: 7	芯材	(端縦	桁)	の断面係数を算	定する	5.

ここでは、主桁強度評価結果で用いた端縦桁の断面係数を記載する。



$$Z_{4} = \frac{a \cdot d^{3} - h^{3} (a-t)}{6d}$$

$$= \frac{80x200^{3} - 178^{3} (80 - 7.5)}{6x200}$$

$$= 192598.3167$$

$$= 192599 (mm^{3}) (小数点第一位切り上げ,整数表示)$$



Po:設計水圧荷重。今回受圧幅と受圧高が既設躯体開口より小さい為、躯体開口内 にかかる水圧荷重が扉にかかるものとする。水圧荷重の計算は受圧幅と受圧高の 数値を躯体開口幅と躯体開口高の数値に置き換えて計算するものとします。

Po=  $\rho \cdot B_1 \cdot (Ho^2 - H1^2)/2$ 

= 10.1x1.515x(14.8²-12.515²)/2

- = 10.1x1.515x62.414775/2
- = 477.5198398(kN)
- = 477.5(kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



|--|

R_r : ヒンジ・ロックバーに作用する扉自重による反力

$$R_r = W_X \cdot \left( \frac{L_r}{L_j} \right)$$

 $= 8.85 \times (0.865/1.745)$ 

= 4.386962751

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

L _r m 扉体重心~ヒンジ中心間距離 35	j)
-----------------------------------	----

L_r: 扉重心位置からヒンジ中心間距離(添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照)

Lj	m	ヒンジ中心間距離	36)	1.745
ц	111		30	1.110

L_j : 最遠端ヒンジ間のヒンジ中心間水平距離 (添付 扉体組立図「SWT-13-002」参照)

$Z_5$	mm ³	断面係数	3	7) 16666		
$Z_5$ :	ヒンジ板の	断面係数 (E	:ンジ板	は2枚/1ヶ	,所)	
とい	ヒンジ板の断面係数を算定する。					



(機械工学便覧 基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)

$$Z_5 = (\frac{1}{6} \cdot b \cdot h^2 = (1/6) \times 40 \times 50^2 = 16666.666.$$

16666mm² (少数点以下第1位切下げ整数表示)

A ₄ mm ² 断面積 38 2000
--------------------------------------------

A₄ : ヒンジ板の断面積 (ヒンジ板は2枚/1ヶ所)

ヒンジ板の断面積を算定する。

L₂ : ヒンジピンにおいて水圧荷重が作用するヒンジ板支持部におけるヒンジピン 軸支持 間の水平距離

$B_2$	mm	ブッシュ長さ	40 90

B2:水圧荷重がヒンジピンに作用するブッシュ長さ
 (添付 ヒンジ部詳細図「SWT-13-004」参照)

<u> </u>
----------

Z₆ : ヒンジピンの断面係数

ヒンジピンの断面係数を算定する。



 $Z_6 = \frac{\pi}{32}$  ) • d³ = ( $\pi/32$ ) x 40³ = 6283. 185307



 $= 6283 \text{mm}^{3}$  (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)

$A_5$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	42 1257

A₅ : ヒンジピンの断面積

ヒンジピンに断面積を算定する。

(添付 ヒンジ部詳細図「SWT-13-004」参照)

$$A_{5} = \frac{\pi}{4} ) \cdot d^{2} = (\pi/4) \times 40^{2} = 1256.637061$$
$$= 1257 \text{ mm}^{2} (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)$$

	$n_1$	本	本数	43 4	
--	-------	---	----	------	--

n₁:扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのヒンジボルト(枠体側)の本数
 (添付 ヒンジ部詳細図「SWT-13-004」参照)

$A_{b1}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	(4) 157

A_{b1} : ヒンジボルト(枠体側)(M16)1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

 $A_{b1}$ = 157mm²

|--|

n₂:扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのヒンジボルト(扉側)の本数
 (添付 ヒンジ部詳細図「SWT-13-004」参照)

$A_{b2}$	$\mathrm{mm}^2$	断面積	<u>46</u> 245

Ab2 : ヒンジボルト(扉側) (M20)1本あたりの有効断面積
 (JIS B 1082: 2009 より)

 $A_{b2}$ = 245mm²

L ₃ mm 作用点	間距離 47 19
-----------------------	-----------

L₃ :水圧荷重がロックバーに作用する軸支持間距離 (添付 ロックバー装置組立図「SWT-13-005」参照)

$Z_7$	mm ³	断面係数	48	12271

Z₇ : ロックバーの断面係数

ロックバーの断面係数を算定する。

(添付 ロックバー装置組立図「SWT-13-005」参照)

(機械工学便覧 基礎編 α3 材料力学 α-22ページより)



 $Z_7 = \frac{\pi}{32}$  ) • d³= ( $\pi/32$ ) x 50³= 12271.8463

			$\Rightarrow$ 12271mm ³	(少数点以下第1位切下げ整数表示)
A ₆	$\mathrm{mm}^2$	断面積	(49) <b>1963</b>	

A₆ : ロックバーの断面積

ロックバーの断面積を算定する。

(添付 ロックバー装置組立図「SWT-13-005」参照)

A₆=
$$\frac{\pi}{4}$$
 )・d²=( $\pi/4$ )x50²= 1963.495408  
⇒ 1963mm² (有効数字5桁目四捨五入有効数4桁表示)

n ₃	本	本数	50 4
			)

n₃ : 扉体重量をうけもつヒンジ1ヶ所あたりのロックボルトの本数

(添付 ロックバー装置組立図「SWT-13-005」参照)

A _{b3} mm ²	断面積	51) 157
---------------------------------	-----	---------

Ab3 : ロックボルト1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

 $A_{b3} = 157 \text{mm}^2$ 

$n_4$	本	本数	52 14

n₄: 枠体を躯体に固定するアンカーボルトの本数
 (3.5 評価方法 (1) 応力算定 e. アンカーボルト 第3-11図参照)

$A_a$	$\mathrm{mm}^2$	1本当たりの表面積 53 10	053
-------	-----------------	-----------------	-----

 $A_a$ :アンカーボルト1本あたりの表面積 (コンクリート付着面積)  $A_a=d \cdot \pi \cdot L= 20x \pi x 160=10053.09649$  $= 10053 mm^2$  (少数点第1位四捨五入整数表示) ここで、 d:  $\phi 20 mm$ L=埋め込み長さ=160 mm

A _{b4}	$\mathrm{mm}^2$	断面積	54	245

A_{b4} : アンカーボルト1本あたりの有効断面積

(JIS B 1082:2009 より)

 $A_{b4}$ = 245mm²

評価対象部位	発生応力度(	$N/mm^2$ )
扉板	55 231	

原子炉建屋付属棟南側水密扉の扉板部の発生応力度は

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 a. 扉板に生じる荷重を算定し,(2)断面検定 a. 扉板より曲げ応力度 を算定する。 なお, 扉板にせん断力は発生しない。

- (1) 応力算定
  - a. 扉板

扉板に生じる荷重は、津波に伴う荷重を考慮し、等変分布荷重及び等分布荷重を 受ける周辺固定支持の矩形板として、次式により算定する。 扉板に生じる荷重と区画の例を第3-2図に示す。

扉板に発生するモーメントは,各評価区画扉部において、作用する荷重が台形 荷重となることから等分布荷重と不等分布荷重に分けることができる。このこと から,芯材による4辺固定における扉板の曲げモーメントは,等変分布荷重四辺 固定スラブ曲げモーメント式と不等分布重四辺固定スラブの曲げモーメント式 を足した次式であらわされる。以下に各区画の曲げモーメントを算出し、最も 大きくなる区画の数値を採用する。なお,算定式は,Mx説明添付図参照。

区面1: $M_1=M_{X1} \cdot W_1 \cdot L_4^2+M_{X2} \cdot (W_2-W_1) \cdot L_4^2$	→ M ₁ :区画1の扉板に発生する曲げモーメント
区面2: $M_2=M_{X3} \cdot W_2 \cdot L_4^2 + M_{X4} \cdot (W_3 - W_2) \cdot L_4^2$	$M_1 = M_{X1} \cdot W_1 \cdot L_4^2 + M_{X2} \cdot (W_2 - W_1) \cdot L_4^2$
区面3: $M_3=M_{X5} \cdot W_3 \cdot L_4^2+M_{X6} \cdot (W_4-W_3) \cdot L_4^2$ 了	=0. 081x125. 1x0. $510^2$
	+0. 047x
ここで、 *	=2.74564161(kN·m)
M _{X1・3・5} :等分布荷重による	=2745642 (N·mm)
曲げ応力算定用の係数 (-)	(少数点第1位四捨五入整数表示)
$\mathbb{W}_{1\sim 4}$ :各区画固定部の単位長さ当たりの	
作業荷重(kN/m)	▶ M ₂ :区画2の扉板に発生する曲げモーメント
L ₄ :区間短辺の長さ(m)	$M_2=M_{X3} \cdot W_2 \cdot L_4^2 + M_{X4} \cdot (W_3 - W_2) \cdot L_4^2$
M _{X2・4・6} :等分布荷重による	=0. 078x134. 1x0. $510^2$
曲げ応力算定用の係数 (-)	+0.045x
	=2.82125268 (kN·m)
	=2821253 (N·mm)
	(少数点第1位四捨五入整数表示)

※ →  $M_3$ : 区画3の扉板に発生する曲げモーメント  $M_3=M_{X5} \cdot W_3 \cdot L_4^2 + M_{X6} \cdot (W_4 - W_3) \cdot L_4^2$ =0.063x142.7x0.510² +0.038x =2.39861619(kN·m) =2398616(N·mm)

(少数点第1位四捨五入整数表示)

M₂>M₁>M₃なので以降の検討は、

M=M₂= 2821253(N・mm)として検討します。



第3-2図 扉板に生じる荷重と区画の図

## (2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が,許容限界値以下であることを確認 する。なお,異なる荷重が同時に作用する部材については,組合せを考慮する。

a. 扉板

扉板に生じる曲げ応力度を算定し,扉板の短期許容応力度以下であることを確認 する。

$$\sigma = \frac{M}{Z_1}$$

ここで、

- M:扉板の曲げモーメント(N・mm)
- $Z_1: 扉板の断面係数 (mm³)$

 $\sigma$ : 扉板に生じる曲げ応力度  $\sigma = \frac{M}{Z_1}$ = 2821253/12240=230.4945261 =  $231(N/mm^2)$ (小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度	$(N/mm^2)$
芯材	56 80	

原子炉建屋付属棟南側水密扉の芯材の発生応力度は 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法(1)応力算定 b. 芯材より発生応力を算定し,(2)断面検定 b. 芯材より応力度を算定 する。なお,ここでは芯材主桁及び縦桁のせん断,曲げにおいて発生応力度結果が 一番厳しい主桁の曲げの値を記載している。

- (1) 応力算定
  - b. 芯材

芯材に生じる荷重は、津波に伴う荷重を考慮し、荷重を負担する芯材の 取付方向(水平又は鉛直)に応じて、それぞれ算定する。水平方向に取付く主桁に ついては、等分布荷重を受ける両端支持の単純梁として次式により算定する。 鉛直方向に取付く縦桁については、扉に生じる荷重を算定し、各桁(中間主桁及 び端主桁)に分担することとし、次式により算定する。芯材に生じる荷重の

(a) 主桁

例を第3-3図に示す。



P₃:水圧荷重(kN/m²)

n₂の場合



= 142.1x0.725x0.2429045=25.02462885
 = 25.02(kN・m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)
 M₁>M₂

n₁の場合

ここで、

B₁:受圧幅(m)

a₁: 主桁ピッチ (m) a₂: 主桁ピッチ (m) a₃: 主桁ピッチ (m) P₁: 水圧荷重 (kN/m²)

P₂:水圧荷重 (kN/m²)

P3:水圧荷重(kN/m²)

$$Q_1 = \frac{P_n + P_{n+1}}{2} \cdot \frac{a_n + a_{n+1}}{2} \cdot \frac{B_1}{2}$$

= 134x0.8725x0.697=81.489755

= 81.49 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)


$M = a_n^2 \cdot \left( \frac{P_{(1\sim3)}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{(4\sim6)}}{8} \right) \cdot c$  $Q=H_g \cdot \left(\frac{P_1}{3} + \frac{P_4}{2}\right) \cdot c$  → ※1 縦桁に作用する荷重は、台形荷重  $P_1 = P'_{h2} - P'_{h1}$  $P_2 = P'_{h3} - P'_{h2} \longrightarrow 3$  $P_3 = P'_{h4} - P'_{h3} \longrightarrow \&4$ → ※5  $P_4 = P'_{h1}$  $P_5 = P'_{h2}$ → ※6  $P_6 = P'_{h3}$ → ※7  $P'_{h1} = P_{h1} \cdot B_1 \longrightarrow 3$  $P'_{h2} = P_{h2} \cdot B_1 \longrightarrow 3$  $P'_{h3} = P_{h3} \cdot B_1 \longrightarrow \texttt{*10}$  $P'_{h4} = P_{h4} \cdot B_1 \quad \longrightarrow \quad \bigstar 11$ 中間縦桁c=1/3,端縦桁c=1/6

→ M:縦桁に作用する曲げモーメント → ※2 であることから、受圧高上下部を支 点とした梁の等分布荷重による曲げ モーメントと三角形荷重による曲げ モーメントを足し合わせた本式であ らわされる。ここでは、発生モーメ ントが厳しくなる中間縦桁(c=1/3) を算出する。

ここで、

a₁: 主桁ピッチ(m)(区画1の縦桁長さ a₂: 主桁ピッチ(m)(区画2の縦桁長さ a₃: 主桁ピッチ(m) (区画3の縦桁長さ P₁:区画1縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m) P2: 区画2縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m) P₃:区画3縦桁に作用する 三角形荷重 (kN/m)

- P₄:区画1縦桁に作用する 等分布荷重 (kN/m)
- P₅:区画2縦桁に作用する 等分布荷重 (kN/m)
- P₆:区画3縦桁に作用する 等分布荷重 (kN/m)
- c:縦桁の作用荷重に対する係数(-)

中間縦桁  

$$M_3 = a_1^2 \cdot \left(\frac{P_1}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_4}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.895²x   
= 0.801025x (0.801875373+21.8) x (1/3)  
= 6.034889074  
= 6.035 (kN·m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_{4} = a_{2}^{2} \cdot \left(\frac{P_{2}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{5}}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.85²x { (12/(9x\sqrt{3})) + (186.9/8) } x (1/3)  
= 0.7225x (0.769800358+23.3625) x (1/3)  
= 5.811862336  
= 5.812 (kN·m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_{5} = a_{3}^{2} \cdot \left(\frac{P_{3}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{6}}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.6²x { (8.5/(9x\sqrt{3})) + (198.9/8) } x (1/3)  
= 0.36x (0.545275254+24.8625) x (1/3)

= 3.04893303

$$= 3.049 \,(\text{kN} \cdot \text{m})$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

端縦桁

$$M_{6} = a_{1}^{2} \cdot \left(\frac{P_{1}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{4}}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.895²x { (12.5/(9x\sqrt{3})) + (174.4/8) } x (1/6)  
= 0.801025x (0.801875373+21.8) x (1/6)  
= 3.017444537  
= 3.017 (kN·m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_{7} = a_{2}^{2} \cdot \left(\frac{P_{2}}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_{5}}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.85²x { (12/(9x 3)) + (186.9/8) } x (1/6)  
= 0.7225x (0.0769800356+23.3625) x (1/6)  
= 2.905931168  
= 2.906 (kN·m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$M_8 = a_3^{\ 2} \cdot \left(\frac{P_3}{9x\sqrt{3}} + \frac{P_6}{8}\right) \cdot c$$
  
= 0.6²x { (8.5/(9x\sqrt{3})) + (198.9/8) } x (1/6)  
= 0.36x (0.545275254+24.8625) x (1/6)  
= 1.524466515  
= 1.524 (kN·m)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



P

Ж1

Q:縦桁に作用するせん断力

曲げモーメント同様梁の等分布荷重によ るせん断力と三角形荷重によるせん断力を 足し合わせ本式であらわされる。ここでは せん断力が厳しくなる中間縦桁(c=1/3)を 算出する。なお、中間縦桁と端縦桁の断面 積はその形状より=1/2にはならない。

ここで、

中間縦桁

- a₁: 主桁ピッチ(m)(区画1の縦桁長さ)
   a₂: 主桁ピッチ(m)(区画2の縦桁長さ)
   a₃: 主桁ピッチ(m)(区画3の縦桁長さ)
   P₁: 区画1縦桁に作用する 三角形荷重(kN/m)
   P₂: 区画2縦桁に作用する
- F2: 区画2和11に1F用9る 三角形荷重(kN/m)
- P₃:区画3縦桁に作用する 三角形荷重(kN/m)
- P₄:区画1縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)
- P₅:区画2縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)
- P₆:区画3縦桁に作用する 等分布荷重(kN/m)

c:縦桁の作用荷重に対する係数(-)

$$Q_3 = a_1 \cdot \left(\frac{P_1}{3} + \frac{P_4}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0.895x { (12.5/3) + (174.4/2) } x (1/3)  
= 0.895x (4.1666...+87.2) x (1/3)  
= 27.2577222...  
= 27.26 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_4 = a_2 \cdot \left(\frac{P_2}{3} + \frac{P_5}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0.85x { (12/3) + (186.9/2) } x (1/3)  
= 0.85x (4+93.45) x (1/3)  
= 27.6108333...  
= 27.61 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_5 = a_3 \cdot \left(\frac{P_3}{3} + \frac{P_6}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0. 6x { (8. 5/3) + (198. 9/2) } x (1/3)  
= 0. 6x (2. 8333... +99. 45) x (1/3)  
= 20. 45666...  
= 20. 46 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

端縦桁

$$Q_6 = a_1 \cdot \left(\frac{P_1}{3} + \frac{P_4}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0.895x { (12.5/3) + (174.4/2) } x (1/6)  
= 0.895x (4.1666...+87.2) x (1/6)  
= 13.62886  
= 13.63 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_7 = a_2 \cdot \left(\frac{P_2}{3} + \frac{P_5}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0.85x { (12/3) + (186.9/2) } x (1/6)  
= 0.85x (4+93.45) x (1/6)  
= 13.80541667  
= 13.81 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

$$Q_8 = a_3 \cdot \left(\frac{P_3}{3} + \frac{P_6}{2}\right) \cdot c$$
  
= 0. 6x { (8. 5/3) + (198. 9/2) } x (1/6)  
= 0. 6x (2. 8333... +99. 45) x (1/6)  
= 10. 228333...  
= 10. 23 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

₩2 |

 ▶ P₂: 区画2の縦桁に作用する三角形荷重 扉に作用する津波による静水圧荷重 (区画上部)から扉に作用する津波に よる静水圧荷重(区画下部)から差し引い た本式であらわすことが出来る。 P₂= P'_{h3}-P'_{h2}= 198.9-186.9=12(kN/m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

 ▶ P₃:区画3の縦桁に作用する三角形荷重 扉に作用する津波による静水圧荷重 (区画上部)から扉に作用する津波に よる静水圧荷重(区画下部)から差し引い た本式であらわすことが出来る。 P₃= P'_{h4}-P'_{h3}=207.4-198.9=8.5(kN/m)
 (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

## Ж5

 ▶ P₄:区画1の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する津波静水圧荷重(区画上部)に 等しい。
 P₄= P'_{h1}=174.4(kN/m)

## Ж6

 ▶ P₅:区画2の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する津波静水圧荷重(区画上部)に 等しい。
 P₅=P'_{h2}=186.9(kN/m)

Ж7 ▶ P₆:区画3の縦桁に作用する等分布荷重 扉に作用する等分布荷重は、扉に 作用する津波静水圧荷重(区画上部)に 等しい。  $P_6 = P'_{h3} = 198.9 (kN/m)$ Х8 → P'_{h1}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (最上部)(kN/m)⑨に算出した扉に作用 する津波による静水圧荷重(上部)が扉幅 で作用するため次式で表すことが出来る。  $P'_{h1} = P_{h1} \cdot B_1 = 125.1 x 1.394 = 174.3894$ = 174.4 (kN/m)(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示) Ж9 ▶ P'_{h2}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (中間上部)(kN/m)⑩に算出した扉に作 用する津波による静水圧荷重(上部)が扉 幅で作用するため次式で表すことが出来る。  $P'_{h2} = P_{h2} \cdot B_1 = 134.1 x 1.394 = 186.9354$ = 186.9 (kN/m)(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

※10
P'_{h3}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (中間下部)(kN/m)⑪に算出した扉に作 用する津波による静水圧荷重(上部)が扉 幅で作用するため次式で表すことが出来る。
P'_{h3}= P_{h3}・B₁=142.7x1.394=198.9238 = 198.9(kN/m)
(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)
※11
P'_{h4}:扉に作用する津波による静水圧荷重 (最下部)(kN/m)⑫に算出した扉に作用 する津波による静水圧荷重(下部)が扉幅

で作用するため次式で表すことが出来る。

P' _{h4}= P_{h4} • B₁=148. 8x1. 394=207. 4272

$$= 207.4 \,(\text{kN/m})$$

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

(2) 断面検定

b. 芯材

芯材に生じる曲げ応力度及びせん断応力度を算定し、芯材の短期許容応力度以下で あることを確認する。



(小数点第一位切り上げ,整数表示)

端縦桁

 $\tau = \frac{Q_7}{A_3} = 13805/1335 = 10.34082397$  $= 11 (\text{N/mm}^2)$ 

(小数点第一位切り上げ,整数表示)

評価対象部位	発生応力度	$(N/mm^2)$
ヒンジ板	57 20	

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジ板部の発生応力度は 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法(1)応力算定 c.(a) より算定する荷重から(2)断面検定c.(a)の検定式により発生応力度を算定する。

応力算定上、扉にかかる水圧荷重は上下4ヶ所のロックピン部でうけもつものとして ロックピンの選定を行うが、保守的にヒンジ部にも1/6の荷重がかかるものとして 計算します。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部

ヒンジ部は、ヒンジ板、ヒンジピン、ヒンジボルト及びアンカーボルトで構成されており、次式により算定する水圧荷重から、各部材に発生する荷重を算定する。 ヒンジ部に生じる荷重の例を第3-4図に示す。

$Rog=\sqrt{\left(\frac{P}{0}\right)^2+R_r^2}$	▶ Rog : ヒンジ部に作用する水平荷重
ここで、	Rog= $\sqrt{(\underline{P})^2 + R_r^2} = \sqrt{(477.5/6)^2 + 4.387^2}$
Rog:水平荷重(kN)	$=79.7040^{0}15744$
Po:水圧荷重(kN)	=79. 70 (kN)
R _r :扉自重反力(kN)	(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)

第3-4図 ヒンジ部に生じる荷重の例

(a) ヒンジ板

ヒンジ板に生じる荷重は、次式により算定する。ヒンジ板に生じる荷重の例を 第3-5図 に示す。

$Q = \frac{Rog}{2}$	ーーーー Q:ヒンジ板に発生する水平荷重によ
2	るせん断力
ここで、	$Q = \frac{Rog}{2} = 79.70/2 = 39.85 (kN)$
Q: せん断力(kN)	
Rog:水平荷重(kN)	

1		

第3-5図 ヒンジ板に生じる荷重の例

(2) 断面検定

各部材に生じる応力より算定する応力度等が、許容限界値以下であることを確認する。 なお、異なる荷重が同時に作用する部材については、組合せを考慮する。

- c. ヒンジ部
- (a) ヒンジ板

ヒンジ板に生じるせん断応力度がヒンジ板の短期許容応力度以下であることを 確認する。

$$\tau = \frac{Q}{A_4} \longrightarrow \sigma : E ンジ板に作用する水圧による曲げ 
 の応力度 
 の応力度 
 σ : 水圧による応力度 (N/mm2) 
 Q : せん断力 (kN) 
 A_4 : 断面積 (mm2) 
 (小数点以下第1位切上げ整数表示)
 (小数点以下第1位切上げ整数表示)
 )$$

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジピン	58) 302

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジピン部の発生応力度は

添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(b)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(b)の検定式により発生応力度を算定する。

(1) 応力算定

c. ヒンジ部

(b) ヒンジピン ヒンジピンに生じる荷重は、次式により算定する。 ヒンジピンに生じる荷重の例を第3-6図に示す。



- (2) 断面検定
  - c. ヒンジ部
  - (b) ヒンジピン

ヒンジピンに生じる曲げ応力度及びせん断応力度を次式により算定し、ヒンジ ピンの短期許容応力度以下であることを確認する。



(小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジボルト (枠体側)	59 127

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジボルト部(枠体側)の発生応力度は、 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(c)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(c)の検定式により発生応力度を算定する。

(1) 応力算定

- c. ヒンジ部
- (c) ヒンジボルト(枠体側)

ヒンジボルト(枠体側)には水圧により引張力がかかる、次式により算定する。 ヒンジボルトに生じる荷重の例を第3-7図に示す。

T=Rog=  $\sqrt{\left(\frac{P_0}{6}\right)^2 + Rr^2}$  → T: ヒンジボルト(枠体側)に発生する 荷重は、水圧により引張力として発生 することから次式より求める。

ここで、 T:引張力(kN) Rog:水平荷重(kN) Po:水圧荷重(kN) R_r:扉自重反力(kN)

T=Rog=  $\sqrt{(\frac{B}{2}^{2}+R_{r}^{2})^{2}} \sqrt{477.5/6^{2}+4.387^{2}}$ =79.70415744 =79.70(kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-7図 ヒンジボルト(枠体側)に生じる荷重の例

(2) 断面検定

- c. ヒンジ部
- (c) ヒンジボルト(枠体側)

ヒンジボルト(枠体側)に生じる引張応力度を次式により算定し、ヒンジボルト 短期許容応力度以下であることを確認する。

$\sigma_{T} = \frac{T}{T}$	
$n_1 \cdot A_{b1}$	する水圧による引張応力度
ここで、	$\sigma_{\rm T} = \tau = \frac{\rm T}{\rm n_1 \cdot A_{\rm b1}}$
$\sigma_{T}: 引張応力度(N \cdot mm^{2})$	$=\frac{79.70}{100000000000000000000000000000000000$
T:引張力(kN)	4x157 0.120011(kk) mm/
n ₁ :ヒンジボルト本数(本)	$= 127 (\mathrm{N} \cdot \mathrm{mm}^2)$
A _{b1} :1本当たりの断面積(mm ²	?) (小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ヒンジボルト (扉側)	60 82

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジボルト部(扉側)の発生応力度は、 添付資料 その2 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定 c.(d)より 算定する荷重から(2)断面検定c.(d)の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - c. ヒンジ部
  - (d) ヒンジボルト (扉側)

ヒンジボルト(扉側)には水圧によりせん断力がかかる、次式により算定する。 ヒンジボルトに生じる荷重の例を第3-8図に示す。

 $Q=Rog= \sqrt{\left(\frac{P_0}{6}\right)^2 + Rr^2} \qquad \qquad Q: Eンジボルト (扉側) に発生する 荷重は、水圧によりせん断力として 発生することから次式より求める。$ ここで、 $Q: せん断力(kN) <math display="block">Q=Rog= \sqrt{\left(\frac{P}{2}\right)^2 + R_r^2} \sqrt{477.5/6)^2 + 4.387^2}$ 

Rog:水平荷重(kN) Po:水圧荷重(kN)

R_r:扉自重反力(kN)

Q=Rog=  $\sqrt{(\frac{P}{-})^2 + R_r^2} = \sqrt{477.5/6}^2 + 4.387^2$ =79.70415744 =79.70(kN) (有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-8図 ヒンジボルト(扉側)に生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - c. ヒンジ部
  - (d) ヒンジボルト (扉側)

ヒンジボルト(扉側)に生じるせん断応力度を次式により算定し、ヒンジボルトの 短期許容応力度以下であることを確認する。

$\tau = \frac{Q}{Q}$	・
$n_2 \cdot A_{b2}$	する水圧によるせん断応力度
ここで、	$\tau = \frac{Q}{n_2 \cdot A_{b2}}$
τ : せん断応力度(N・mm ² )	$=\frac{79.70}{100}=0.08132653$ (kN · mm ² )
Q: せん断力(kN)	4x245 0.00102000 (M/ mm)
n ₂ :ヒンジボルト本数(本)	$= 82 (N \cdot mm^2)$
A _{b2} :1本当たりの断面積(mm ²	) (小数点以下第1位切上げ整数表示)

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ロックバー	61) 185

原子炉建屋付属棟南側水密扉のロックバー部の発生応力度は 添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定d.(a)より 算定する荷重から(2)断面検定d.(a)の検定式により発生応力度を算定する。

応力算定上、扉にかかる水圧荷重は上下4ヶ所のロックピン部でうけもつものとして ロックピンの選定を行う。保守的にヒンジ部では荷重をうけないもの計算する。

(1) 応力算定

d. ロックバー部

ロックバー部は、ロックバー及びロックボルトで構成されており、次式により算定 する水圧荷重から、各部材に発生する荷重を算定する。

ロックバー部に生じる荷重の例を第3-9図に示す。

$\operatorname{Rog} = \frac{P_0}{4}$ $\longrightarrow$ Rog	: ロックバー部に作用する水平荷重
------------------------------------------------------------	-------------------

ここで、 Rog:水平荷重(kN) Po:水圧荷重(kN)  $Rog = \frac{P_0}{4} = 477.5/4$ =119.375 =119.4 (kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-9図 ロックバー部に生じる荷重の例

(a) ロックバー

ロックバーに生じる応力は、次式により算定する。 ロックバーに生じる荷重の例を第3-10図に示す。

M=Rog・L₃ → M:ロックバー部に発生する水圧による

ここで、

M:曲げモーメント(kN・mm)

=2268.6 =2269 (kN • mm)

曲げモーメント

 $M=Rog \cdot L_3=119.4x19$ 

Rog:水平荷重(kN)

(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)



第3-10図 ロックバー部に生じる荷重の例

## (2) 断面検定

- d. ロックバー部
- (a) ロックバー

ロックバーに生じる曲げ応力度は、次式により算定し、ロックバーの 短期許容応力度以下であることを確認する。

$$\sigma = \frac{M}{Z_7} \longrightarrow \sigma : □ = 2269/12271$$

$$\sigma : 水 E に よ 3 応 力 度 (N/mm2) = 0.184907505 (kN \cdot mm2)$$

$$R : 曲 i i モーメント (kN \cdot mm) = 184.9075055 (N \cdot mm2)$$

$$Z_7 : 断 面 係 数 (mm3) = 185 (N \cdot mm2)$$

$$(小 数 点 以 下 第1 位 切 上 i r 整 数 表 示)$$

評価対象部位	発生応力度(N/mm ² )
ロックボルト	62 191

原子炉建屋付属棟南側水密扉のロックボルト部の発生応力度は 添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1)応力算定b.(b)よ 算定する荷重から(2)断面検定d.の検定式により発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - d. ロックバー部
  - (b) ロックボルト ロックボルトには水圧により引張力がかかる次式により算定する。 ロックボルトに生じる荷重の例を第3-11図に示す。





第3-11図 ロックボルトに生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - d. ロックバー部
  - (b) ロックボルト

ロックボルトに生じる引張応力度を次式により算定し、ロックボルトの 短期許容応力度以下であることを確認する。



評価対象部位	発生応力度 (kN)
アンカーボルト	63 35

原子炉建屋付属棟南側水密扉のアンカーボルトの発生応力度は

添付資料 強度評価 水密扉の強度計算書 3.5 評価方法 (1) 応力算定 e. アンカ ーボルトより算定する荷重から、(2) 断面検定 e. アンカーボルトの検定式により 発生応力度を算定する。

- (1) 応力算定
  - e. アンカーボルト

アンカーボルトは、枠体を躯体に固定している。扉体に生じる水平荷重が枠体 に伝わるとして、各アンカーボルトに発生する荷重を次式により算定する。 アンカーボルトに生じる荷重の例を第3-12図に示す。

$T = \frac{P_0}{n_4}$	→ T:アンカーボルトに発生する荷重は、
4	水圧荷重をアンカーボルトの本数分
ここで、	で受け持つので次式より求める。
T:引張力(kN)	$T = \frac{P_0}{n_4}$
Po:水圧荷重(kN)	=477. 5/14=34. 10714286
n ₄ :アンカーボルト本数(本)	= 35 (kN)
	(小数点以下第1位切上げ整数表示)

## 第3-12図 アンカーボルトに生じる荷重の例

- (2) 断面検定
  - e. アンカーボルト

(1)応力算定で算定したT:荷重を、アンカーボルト1本当たりに生じる引張力 とする。

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
扉板	64) 235

扉板の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質:	
・板厚:	

原子炉建屋付属棟南側水密扉の扉板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101:2015」P26より

降伏点 235N/mm²、引張強さ 400N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。 「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (235, 400x0.7) = $235 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、235 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値	$(N/mm^2)$
芯材	65 23	5

芯材の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

•	材質

・板厚 t

原子炉建屋付属棟南側水密扉の芯材の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 3101:2015」P26より

降伏点 235N/mm²、引張強さ 400N/mm²(保守的下限値)から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度 F 値は、降伏点及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (235, 400x0.7) =235(N/mm²)

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、235 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ヒンジ板	66 118

ヒンジ板の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジ板の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) =205 (N/mm²)

せん断許容応力度は、F=205/3℃なるので、

許容限界値は、118 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ヒンジピン	67 345

ヒンジピンの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

•	材質:	
•	直径:	

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジピンの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 345N/mm²、引張強さ 690N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (345, 690x0.7) = $345 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、845 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界值(N/mm ² )	]
ヒンジボルト (枠体側)	68 205	
ヒンジボルト(枠	体側)の許容限界値に	- こ係る仕様は、以下のとおり。

材質:

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジボルト(枠体側)の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) = $205 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、205 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ヒンジボルト (扉側)	69 118

ヒンジボルト(扉側)の許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質

原子炉建屋付属棟南側水密扉のヒンジボルト(扉側)の許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) = $205 (N/mm^2)$ 

せん断許容応力度は、F=205/√3になるので、

許容限界値は、118 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界值(N/mm ² )
ロックバー	70 345

ロックバーの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質:	
・直径:	

原子炉建屋付属棟南側水密扉のロックバーの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 345N/mm²、引張強さ 690N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (345, 690x0.7) =345 (N/mm²)

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、³45 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界値(N/mm ² )
ロックボルト	71) 205

ロックボルトの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

・材質:

原子炉建屋付属棟南側水密扉のロックボルトの許容限界値を算出する。

「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」P1213より

耐力 205N/mm²、引張強さ 520N/mm²から許容曲げ応力度を求める。

「国土交通省告示」より

基準強度F値は、降伏点(耐力)及び引張強さの70%のどちらか小さい値より

F=MIN (205, 520x0.7) = $205 (N/mm^2)$ 

ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5となり、短期に生じる応力は、1.5倍とすることから 許容限界値は、205 (N/mm²)

評価対象部位	許容限界值(kN)
アンカーボルト	72 39

アンカーボルトの許容限界値に係る仕様は、以下のとおり。

<ul> <li>材質:</li> </ul>	
・サイス	

原子炉建屋付属棟南側水密扉のアンカーボルトの短期許容引張力を算出し許容限界値とする。

P _a =P _{a1} or P _{a3} (どちらかの小なる値)	──→ P _a :アンカーボルトの短期許容引張力
	「各種合成構造設計指針・同解説
ここで、	日本建築学界2010」P45
P _a : 短期許容引張力(kN)	接着系アンカーボルトの設計より
	$P_{a1} = \phi_1 \cdot s \sigma_{pa} \cdot sca$
	= 1x205x245=50225 (N)
	= 50.225 (kN)
	= 50 (kN)
	(小数点以下第1位切下げ整数表示)
	ここで
	$\phi_1$ : 「4.5.1引張力を受ける場合」の
	表4 低减係数
	_s σ _{pa} :接着系アンカーボルトの規格降伏点
	アンカーボルト仕様 SUS304, M20より
	「鉄鋼Ⅱ JIS G 4303:2012」
	P1213より
	耐力 205N/mm ² 、引張強さ 520N/mm ²
	から許容曲げ応力度を求める。
	「国土交通省告示」より
	基準強度 F 値は、降伏点(耐力)及び
	引張強さの70%のどちらか小さい値より
	F=MIN (205, 520x0.7) =205 $(N/mm^2)$
	ここで、曲げ許容応力度は、F/1.5とな
	り、短期に生じる応力は、1.5倍とする
	ことから許容限界値は、205 (N/mm ² )
	これを降伏点とする。

$$s_{c}a: 基礎アンカーボルトの断面積P30 A_{b4}: アンカーボルト1本あたりの有効断面積よりs_ca=A_{b4}=245 (mm2)Pa3= (2/3) ·  $\tau_{a} \cdot \pi \cdot d_{a} \cdot 1_{ce}$   
= (2/3) x7.760x3.141592654x20x120  
= 39006.01439 (N)  
= 39 (kN)  
(小数点以下第1位切下げ整数表示)  
ここで  
 $\tau_{a}: \sim 0$  あきを考慮した接着系アンカー  
ボルトの引張力に対する付着強度  
 $\tau_{a}=a_{1} \cdot a_{2} \cdot a_{3} \cdot 10 \sqrt{F_{c}/21}$   
= 0.83x0.93x0.98x10  $\sqrt{22.1/21}$   
= 7.760212362  
= 7.760 (N/mm²)  
(有効数字5桁目四捨五入有効数字4桁表示)  
 $a_{n}: \sim 0$  あき寸法を考慮した低減係数  
 $a_{n}: 0.5(\frac{C_{n}}{1e}) + 0.5=0.5x1 + 0.5=1$   
 $C_{n}: \sim 0$  あき寸法を考慮した低減係数  
 $a_{n}: 0.5(\frac{C_{n}}{1e}) + 0.5=0.5x(107.5/160) + 0.5$   
= 0.835938  
= 0.83  
(少数点以下第3位切下げ少数点第2位表示)  
 $a_{3}= 0.5(\frac{C_{n}}{1e}) + 0.5=0.5x(155/160) + 0.5$$$

= 0.98

(少数点以下第3位切下げ少数点第2位表示)

F_c: コンクリート付着強度
 3.4 許容限界(2) b 第3-6表
 アンカーボルトの許容限界より
 22.1(N/mm²)
 d_a: アンカーボルトの径 φ20(mm)
 1_{ce}: アンカーボルトの強度算定用埋込み長さ
 1_{ce}=1_e-2d_a=160-2x20=120(mm)

 $P_{a1}: 50 (kN) > P_{a3}: 39 (kN)$ たので、Pa=39 (kN)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
扉板	73 0. 99

原子炉建屋付属棟南側水密扉、扉板の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する 発生応力度/許容限界値より

から

231/235=0.982979

⇒0.99 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
芯材	74 0.35

原子炉建屋付属棟南側水密扉、芯材の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出する。 発生応力度/許容限界値より

80/235=0.340426

⇒0.35 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジ板	75 0. 17

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ヒンジ板の許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出 する発生応力度/許容限界値より

から

20/118=0.16949

⇒0.17 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジピン	76 <b>0.</b> 88

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ヒンジピンの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出 する。発生応力度/許容限界値より

302/345=0.875362318

⇒0.88 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジボルト (枠体側)	17) 0. 62

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ヒンジボルト(枠体側)の許容限界値に対する発生応力度 の裕度を算出する。発生応力度/許容限界値より

127/205=0.619512195

⇒0.62 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ヒンジボルト (扉側)	78 0. 70

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ヒンジボルト(扉側)の許容限界値に対する発生応力度 の裕度を算出する。発生応力度/許容限界値より

82/118=0.694915254

⇒0.70 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ロックバー	79 0.54

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ロックバーの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出

する。発生応力度/許容限界値より

185/345=0.536231884

⇒0.54 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
ロックボルト	80 0.94

原子炉建屋付属棟南側水密扉、ロックボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を算出 する。発生応力度/許容限界値より

191/205=0.931707317

⇒0.94 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)

評価対象部位	発生応力度/ 許容限界値
アンカーボルト	81) 0.90

原子炉建屋付属棟南側水密扉、アンカーボルトの許容限界値に対する発生応力度の裕度を 算出する。発生応力度/許容限界値より

35/39=0.897435897

⇒0.90 (小数点以下第3位切上げ小数点第2位表示)